H 2T 19

224
220

高橋五郎著

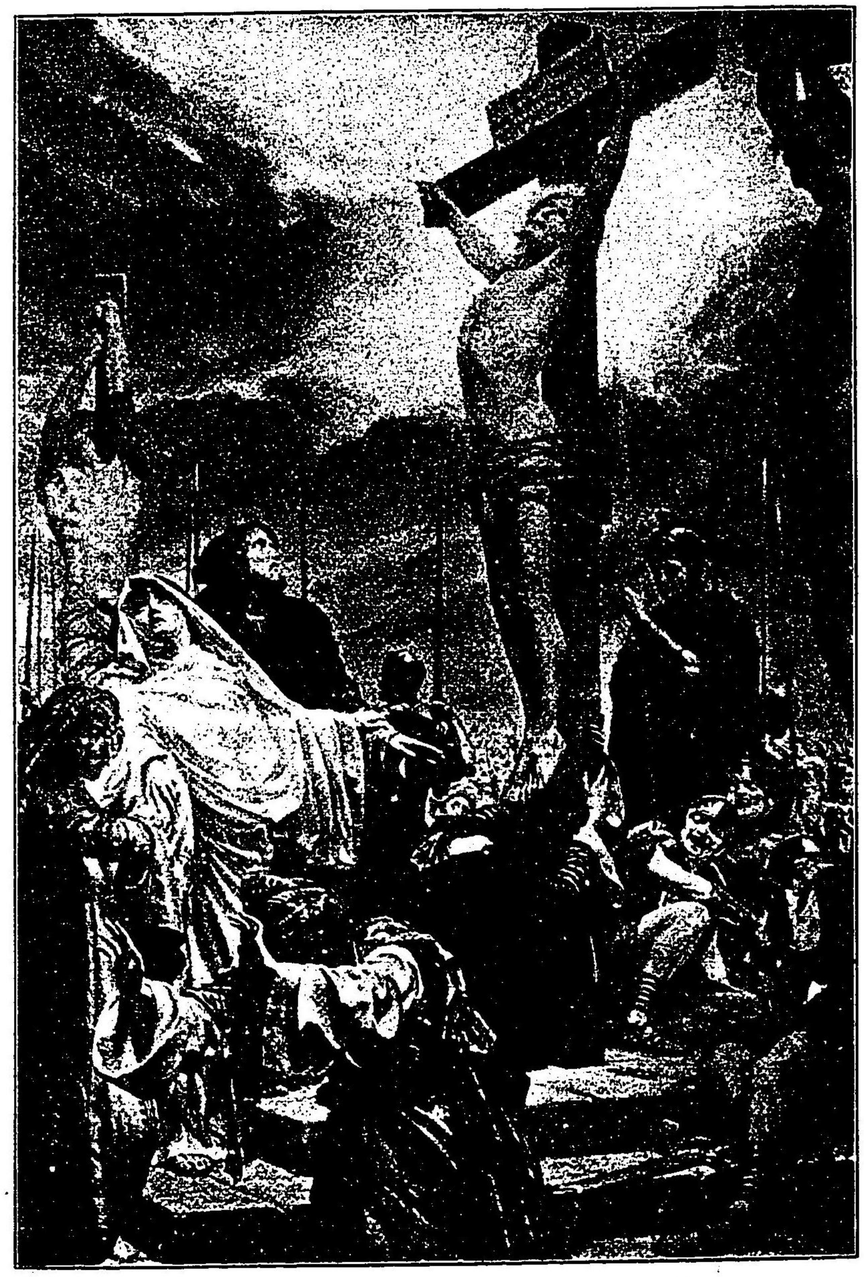
基督活殺論

豐文館藏版

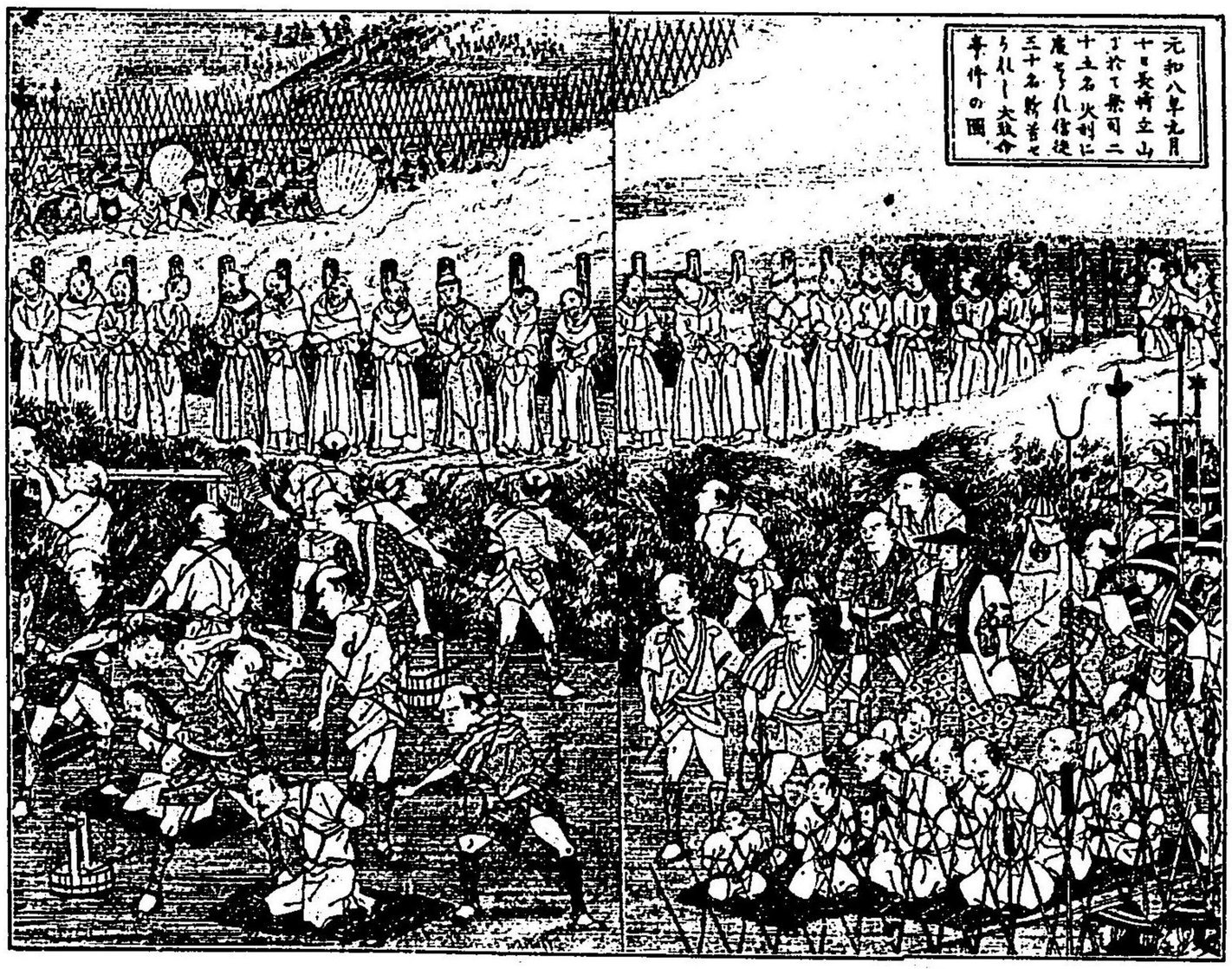
324-280
324
280

基督活殺論

45. 3. 29
內交



基督十字架上に釘死の光景
（セギスムンド・ゲーツエ畫）



元和八年九月十日長崎立山に於て祭司二十五名火刑に處せられ信徒三十名斬首せられし大致命事件の圖

基督活殺論

目次

第壹章
大聲は俚耳に入らず……一
俗眼俗耳は視聽蒙昧不靈を免さず
第貳章
抹殺論者の魂膽及び詭辯……二
基督の神子觀と烏有說
第參章
沙翁と基督……五七

非英雄崇拜的慳吝心

第四章　基督果して當時に知られざりしや……八九

猶太歴史家ヨセフエツヨセーフアス一と羅馬歴史家タシタス、スウエルマウス、少プリニ

第五章　基督亦當時に知らる……一一六

聖書以外猶太古典中の傳説

第六章　基督教徒の迫害と基督の存在……一三九

『殉教者の血は教會繁殖の種子』

第七章　地下の證蹟――土中聲あり……一八二

墜墳の在存と其の基誌録等

第八章　魚の表號――『ナザレのイエス』……二〇七

何故に基督教は魚の表號を用ひしや

附録　基督教會發達小史

『教會史の淵源――二、教會史の時期――三、猶太教――四、所謂律法及び預言――五、希臘文學及羅馬帝國――六、猶太教と異教の接觸――七、使徒時代の一般の性質――八、使徒時代の年歴――九、耶路撒等の教會及び彼等の事業――一〇、異邦傳道の準備――一一、感化前の保羅――一二、パウロの感化――一三、パウロの事業――一四、パウロの傳道事業――一五、猶

目次終

太人の叛亂、羅馬人の來征――一六、トレージャン帝の治世――一七、ハドリヤン帝の治世――一八、コンスタンタイン大帝――一九

序

基督教は、其名の示す如く、基督を以て其教祖と爲す、恰かも釋教が釋迦を以て教祖と爲し、馬哈默多教がマホメットを以て教祖と爲すが如し。斯く又キリストを信ずる人々は、キリストの滅後若干年にして始めてシリアの首都アンテオケに於て、クリスチアンと呼ばるゝに至りぬ。是れ其初キリスト（或クリスト、或ハリスト）と名くる神人ありて此教を創設したるを表示する者とす。然るに此創設者たる基督若し烏有たりしならんには、――教理は兎まれ角まれ、――基督教たる者忽ち小説化して、人格上より來れ

る德化の如きは、爲に其一半を減じ去らんとす。小說は儒夫を奮發興起せしむる者にあらず、古來大閤記を讀んで奮然志を立てたる者多しと雖も、水滸傳または八犬傳を讀みて猛然蹶起したる者は極めて少なければ也。論語は文宣王孔子ありてこそ始めて天下に重きを爲す者なれ、若し之をして一篇の小說ならしめば、「丘は幸ひなり過あれば人必ず之を告ぐ」的の溫然玉の如き美德は、忽ち其光を失なひ了らなん。之を要するに、基督ありてこそ其弟子もありたるなれ、使徒保羅彼得約翰の如き大人物豈一冊の小說に感じて彼が如く身命を福音の宣傳弘布に獻げんや。否な本論にも說る如く、其所謂福音なる者

如何にして世に出んや、誰が之を揑造せしや。三歲の小兒にしてカントの純理批判を書き得たらんには、基督敎の福音書も亦僞作揑造せられ得べし、然らざれば斷じて能はず。

然のみならず、論者は基督敎の聖書を數百年後世の僞作と妄稱すれども、例へば西部亞細亞シリア國にてシリア語に飜譯せられたる聖書の如きは、既に已に西洋紀元壹百五十年より貳百年までの間に成れりとさへ信ぜらる、拉甸譯の聖書また然り、而して此等兩者は其採錄の點に於て同じからず、各々獨立の判斷力を示しをれり。若し福音書の原本なくば、如何にして此等の譯書出で來

しぞや。火なくして豈煙おこらんや、物なくして豈影あらはれんや。

是に由て觀きたれば、福音書の夙に實在したることは爭ふべき餘地なし、而して又福音書は基督なくしては到底出來得べき者にあらず。又基督なかりしならば、十二使徒も起り得べからず、ナポレオン實に在りてこそ夫の有名なるナポレオン、ランス等の十二元帥も出で來しなれ。ナポレオンは常に誇りて言へり、我は泥土を以て我が金玉の將帥を多く造り出したりと。基督の十二使徒も亦之と粗其の趣を同じうす。殊に聖保羅の如きは當時に傑出し、本國にありてはガマリエルの門人として律法に精

通し、外國に出ては天下文學の首府希臘のアテンスに其古詩を朗誦して群哲學者の膽を奪へり、又當時の傳說に依れば、羅馬の大哲セネカと聖保羅との間に交際ありたりと云ひ、其贈答往復の書翰と稱する者さへ十四通の多きまで傳はれり（其中六通は保羅よりセネカに八通はセネカより保羅に與へし者と稱す）。斯く此等の大使徒は天下の大舞臺に立ちて萬人具瞻の地位に活動したり。此の如き日月と光を爭そふ大事實は、區々たる炬火を振たてゝ照蝕し去り得べき者に非ず。然るに輓近――西洋に既に熄滅せるラショナリズムの擊に傚ひてか――基督の抹殺を以て自ら任ずる者我が國に輩出し、余が尊敬する（日本太古史の著者）本村鷹太郎

氏、及び(西域探撿記の著者)佐々木照山氏までも、或は絶對的に、或は滑稽的に指を此或興味ある大問題に染め、世間の附和雷同者亦極めて夥だしからんとすれば、余輩が眞理の爲めに一言するも決して徒勞ならじ。前者がペテロ(岩石の義)を磐余に比し、後者が日本語の「まり」を以てマリアこいふ名の出處と爲せる如きは、姑らく措き、重大なる誤解或ひは誤讀の如きは、本論に之を辨ぜり。但し我輩は徒らに議論或は惡感を增長せざらん爲に、本書に於ては破邪顯正の破邪を成るべく省略し、專ら顯正の手段方法を採らんと試めたり、是れ聊か微意の存する所とす、是れ百千の揣摩臆測は一の確乎たる事實に敵し得ざるを知

れば也。

明治四十五年三月

著者識

Facta non verha

事實のみ

空言に非ず

基督活殺論

高橋五郎著

第一章　大聲は俚耳に入らず

俗眼俗耳は視聽蒙昧不靈を免れず

蓋し極端と極端とは相合すとかや實に極熱が能く物を燒く如く、極寒も亦能く物を燒く也。斯の如く、極めて貴重なる物と極めて賤廉なる物とは俱に價無し。例へば此の地球は無價なり、吾人の生命も亦無價なり、餘りに貴重にして價値の附くべき者なければ也、今汝に千萬圓を與へて汝の生命を取らんと言はば、乞丐の徒と雖も、必ずや斷乎として之を辭せん。誰か復己が生命を金銀に易へて賣るを甘んせんや。斯の如く、途上に散亂せる瓦

礫砂石の如きも、萬人の蹈踐に委せられて、毫も特殊の實用なき限りは、是亦半錢の價をも有せず、如何に廉く賣らんと欲すとも、誰か復た肯て之を買はんや。俱に是れ無價なり、但世人之が區別を明かにすべし、前者をば特に無價(Priceless)と稱し後者をば無價値或は無用(Valueless)と稱す、一は其の價餘りに大にして計る可からず一は其の價餘りに小にして名く可からざれば也。

斯の如く又天體間の音樂(Sphere-music)は聲調餘りに高くして吾人の聽を超え、螻蟻の談話は語音餘りに低くして吾人の耳に入らず、斯の如く又地球は其の廻轉すること餘りに迅速なるが故に、一見毫も動搖の痕迹なくして、全く至極の靜止狀態に在る者の如し。獨樂に於ける、活動寫眞に於ける、皆然らざる無し、至動と至靜は全然其の外觀を同じうす。

是故に古より曰ふあり、至人は名なしと。抑も世には名なき者夥し而して其の名なき者は必ずしも皆碌々たる諂劣庸愚の徒のみに非ず、中には又往々韜晦の臥龍、陸沈の淮陰ある而已ならず、時に或は許由巢父の如き至人

若くは接輿漁夫の如き狂哲ありて存す、殊に後者の類に至りては智慧を衒ひ名聞を求めざるが故に、啻に其の名聲の著はれざる而已ならず、却つて其名の世に知らるゝを厭ひ、縱や寓言にもせよ、天下を讓らんと言はれてすら也耳を清泉に洗ひて之が汚れを潔めたりと稱す。此の精神たるや、是れ名利に遑々汲々たる凡夫の到底領會し得べき者に非ず、然しながら俗人に理會されざればとて、決して其の必無を斷言すべからざる也。彼等俗人なる者は世間の所謂富貴を尺度として英雄豪傑を視るが故に、肥馬輕喪若くは馬車自動車を以て英傑の標識を爲し、破帽弊衣徒步の英雄俊傑や聖人賢哲を窮巷陋屋の內に覯んことを期せず、天下を救ふの名訓と雖も、大夏高樓の天井に響かざる者は、之れを傾聽せず、狂人の寢言にあらざれば、癡人の夢談として之を馬耳東風視し去らんと欲す、是亦幾分は所謂大聲の俚耳に入らざる者耳。

斯の如く俗人の耳目を標準として英雄聖賢の高卑有無を論斷せんと試

むるは色盲者に向ひて五色七彩の別を詢ふが如くにして、到底其の判斷の正確を望む可からず必ずや赤か青か又は其の他の色の認められざる者あるべし、然るに其の認められざる色彩は、觀察者の網膜に缺陷ありて之を認め得ざる而已、實際には確乎と存在して、具眼者には皆判然と認められたる也。之を要するに、俗人は、讀んで字の如く、俗人にして、超絶的(トランセンデンタル)神靈的(スピリチュアル)なる事件を理會する能はざる者とす。故に神人や至人や聖哲の存在(有無)を彼等に問ふは、最も見當を誤まれるの大なる者と謂はざる可からず、聾者に音樂の巧拙を詢ふと其の愚や伯仲せんのみ。六律八音の妙は師曠伯牙、ベートーベン、リグネルの如き大音樂家にこそ諮詢すべけれ。市中音樂隊の人々は、玉乘や廣告の爲めに其の靈腕を揮ふて可なり、阿古屋の琴責に審判官たるべき者には非ず。寶玉を錦襴に裹みてこそ始めて世俗は其の物の尤も貴重なるを悟るめれ、趙氏が所謂連城の璧と雖も、英皇の持てりし世界最大なるダイヤモンドと金剛石と雖も、之を裹むに帆布を以てせば、俗人の眼中には毫も

瓦石と擇ぶ所なかるべし。然れば英國の帝室は嘗て南亞弗利加より其の世界最大なる金剛石を本國に運搬するに當りて、俗人の此の淺薄なる眼光を愚弄したりと聞く、即ち英國は南亞より例の最大最貴なる金剛石を移し來るに際し、途中に开が强賊の爲に奪はれんを恐れて、先づ金銀を鏤めたる華麗の筥を造り、之に贋金剛石を藏めて、至も恭しげに第一等の客車に安置し、嚴めしき護衛兵を之に附して、寸毫の油斷も無きが如くにして之を倫敦に送達せしが、其の實は之と同時に一箇腹心の官人眞正の大金剛石を懷き、て、飄然三等客車に乘り、何人の猜疑心をも好奇心をも惹き起すこと無くして、無事安全に悠然ウヰンゾル宮城に到着したり。嗚呼是れ純然たる水滸傳的送金法にして、文明の今日に於てや、殊に俗眼の愚弄せられて笑止千萬なるを覺ゆ。

俗人の此の、粗劣なる眼光、短小なる瞳孔を諷刺して特に痛快なるは、例の一休禪師が不諱直截なる奇行に在りとや言はん。一休禪師嘗て京都の某

富商より法事に招請せれてありしが、徒らに長く經文を誦むは、一片の金箔を度與するに若かじとて、先其の日早朝墨染の粗法服を纏ひ、托鉢の乞食僧然として同紳商の門口に願以此功德平等利益を唱ふべく回向に訪れしに、果して夫妻は怫然として聲も荒々しく、今日は大事の法要を修するとて殊に忙はしきに、何とて乞食坊主に回向する暇などやあらんと、慳貪にもすげなく逐還しやりぬ。後刻一休師は時分をはかり、金襴緞子の袈裟法衣嚴めしく玄關より靜々と入り來りしかば、商人夫婦は叮嚀に出で迎へて、奥座敷の上座に案内し、頓て法要儀式かたのごとく相濟むや、百味の飲食も粹を拔き美を盡くしつ、脚高の大膳に處狹きまで堆たかく盛りあげ、二の膳さでも豐富に添へて差出しぬ。一休和尚は之を見るや、忽ち金襴の袈裟衣を脫ぎて飾り立て之に右の膳部を悉く供へ、我が身は下位に降りてツイ居たまひしかば、亂家の驚愕一方ならず、是はそも如何なる御事にやと怪しみ問ふを、然こそと禪師は『否とよ、怪しみめさるな、今朝早く愚僧が親ら麻の黑衣着て

回向に參りたるに、御身等は手が塞がりをるとてすげ無くも遂ひかへし、今度愚僧が金襴、法服着けて參るや、いとも叮嚀に待遇されたれば、朝も今も余は同じきを、是は必定金襴の法服に馳走さるゝ者ならんと心得、斯くは致しつるにこそ、努め驚き怪しみめさるるなよ』と短刀直入に急處をつきて、戒しめられ、紳商夫妻は畏れいり且愧ぢいりて、坐ろに冷汗を流しけるとぞ。

實際の狀態既に斯の如くなるが故に、古來聖賢または英雄にして其の身の不明なる者多かりしは、自然の勢にして、固より其の處なりと謂はざる可からず。然れば特に神人或は聖人の有無を論ずるに際し、其の人が一般の人に謳歌せられざりしと云ふを以て、――即ち其の人がポピュラルならざりしと云ふを以て、――之が存在を否定する如きは、決して是れ達識者の爲にあらず、眼光の紙背に透らざる者なればかり。否吾人は却つて其の初め世俗の眼底に大きく映せざりし偉人をこそ寧ろ眞正の偉人と斷せんと欲す。境遇の然らしむる所として最初より自身陣頭に立たる如き者はおの

づから別問題に屬す。」普通の所謂英雄に至りても亦然り。夫の韓信が長安に市人の股下をくぐり、窮して食を漂母に乞ひし時に當りてや、誰か彼を英雄と思ひたる者あらん、然れども一たび志を得て、三軍を指揮するに至りてや、五十萬、百萬、多々益す辨じ背水の陣は以て孫吳の理想を實現せり。クライヴ(Clive)が故郷を遂はれて東洋に流れ來り、東印度商社に鐵筆を執りて、簿記の業に鞅掌せる時に於て、何人が彼をブラッシの綠野に背水の陣を布ける印度征服の英雄と認めし者あらん、又夫のフレデリク大王の如き、其の尙大子として、ヴヲルテールの師導下に佛蘭士文學に心醉し、屢ば橫笛を弄し、風流韻事餘念なく、時に武骨一轍なる父王の逆鱗に觸れ、鐵拳を喫ひ、熱馬を浴び、甚だしうしては脫營者に擬せられて死刑を父君より宣告せられたる時代に於てや、世人は唯一箇の文弱無能なる貴公子を太子に認めたらん而已なりしと雖も、一たび父王崩じてプロシアの王位を紹げるや、寄貨惜くべしとして四方より攻め來れる列强の大兵を一手に引き受け、十年の久しき間敵兵をして、一指をも我が領域に染めしめず、遂に大王(Der Grosse Gr.)の稱を博し得つ、ナポレオンをして伯林に开が偉業を讃歎せしめたり。

斯かる事實の世界に夥しきが爲にや、西洋諸國には『愚人は大成功者』との諺さへ出で來たりぬ。故に某士は嘗て他より『愚人』と罵らるゝや、之を遮りて、『待てよ、余は未だ愚人と呼ばれる程に成功せぬ』と叫べりとぞ。寔に學校にて『木匙』『馬鹿』等と呼ばれたる人々にして、却つて世に出づるや赫々の勳功を建てし者枚擧に暇あらず、例へばスコット、スウヰスト、ニウトン等皆、校に在りては毫も秀才の譽なき者なりしが、世に出て後彼が如く天下の文學界又は學術界に其の名を轟かすに至りぬ。カーライル曰く、『嘗てエヂンバロの學校にジョン、ワヲルタルといふ二人の少年級を同じうしてありしが、ジョンは敏捷にして善く學び常に級の首位に立ちしにワヲルタルは遲鈍にして且惰り常に級の末席にをりぬ、而して遂に甲はハンタルスクエアルの區長ジョン殿となり、乙は天下のサー、ワヲルタル、スコット公と成れり。

諸の疎中にて最も早く成長發育する者は嗟夫キャベヂなる哉！」是亦老子の所謂大器晩成の一例なる歟。

第二章　抹殺論者の魂膽及び詭辯

基督の神子觀と烏有說

世には從來基督（キリスト）の存在を否定せんと欲する人々少なからず、種々さまざまの方面よりして之が否定を試み、往々甚だ奇警なる者ありて、正統派なる反對家をしてすらも時に或は微笑を禁ずる事能はざらしむ。或人々（ドレヴズの如き者）は主張して曰ふ、基督は初よりして『神の子』とせられてありたれば、其の此の世に人として生れをりたる事嘗て認められざりしが、輓近唯理的（ラショナル）聖書批評（所謂高等批評）の起りて以來始めて人間としての基督を論ずるに至り、基督の有無虛實は茲に始めて問題と成りぬと。彼等は思ふらく、基督を神の子と觀じたりし信仰――即ち基督神子觀――は是れ初より基督を神とした る者にして、基督を神とせるは即ち基督が人間として此の世に生れをりたる者に非ざるを信せるなれば、基督教會に於てすらも基督の人間的存在を

認めざりし者なるを、僅々百年内外に唯理的聖書批評家輩が基督を單に人間と見做したるが故に、茲に始めて彼が人として實際に存在せし者なるか或は理想として純ばら宗教家の胸裏に存在せし者なるかといふ問題世に喧しく成り來れるのみと。

此の説や一見甚だ奇警なるが如くなれども、其の實は全く一種の詭辯に過ぎざれば、畢竟是れ亦一を知りて未だ二を知らざるの妄計たるを奈何せんや　第一『神子』といふは其の人の實際に存在せざるを表すとの見解、文字の曲解にして、深く考慮するの價値なき者とす。例へば支那にては古くより其の國の主權者を『天子』と尊稱せり。李太白の如きは、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙。畢竟『天子』とは即ち『天の子』の謂ひにして、『神の子』と粗其の意味を同じうす、然れども是れ決して其の代々の皇帝が皆人間として存在せざりし者なるを謂ふに非ず、却つて其の人間に於ける職の最も優越に、其の天下に臨める德の極めて高大なるを謂ひあらはせる者とす、而して、又若

し政治學上より其の解釋を求むれば、是れ墨子の所謂天に倘同するが故に天子と稱すべき者なるべし。兎に角決して其の人物の空なるを暗示するに非ず、却つて其の人物が尋常の人物より千萬倍も偉大なるを表示する也。然れば實は是れ一人にして千萬人分の生活を爲す義理なれば、不存在にはあらで、存在して又存在し、以て天地の間に磅礴する者ならずや、換言せば、是れ最も大に存在せる者とす。

斯の如く基督若し神子として世に立ちたりとせば、他の衆人に比べて基督は千萬倍餘計に存在したる者とこそ謂ふべけれ。如何となれば斯く地位も無く、金銀も無く、純ら道德と知見とを以て天下萬人より遂に神子と崇められるゝには、必ず其の生活間に絶大の感化力を世間に揮ひたりしや疑なければ也。

然のみならず、論者が右の神子觀を以て基督非實有の輿論と見做したるが如きは、啻に事實に相違する而已ならず又該神子觀の由來及び歴史を辨

へざる安所と謂はざる可からず。

抑も基督が自ら『神の子』と稱したる事は、其の意味は如何なる者なりしにもせよ、實際是れ最初よりして反對派の攻擊を招きたる者なるが、基督の十字架に釘殺せられたる事も其の原因の一は此の神子說に在りしや疑を容れず。要するに、神の子とは希百來語のメッシア(救主、希臘語のキリストと同精神の語にして、基督は屢ば信徒及び其の他の人々より神の子キリストと稱へられたり、否基督自身も亦然か其の口に言へり。是を以て反對派の人々が遂に基督を執へて、之を時の祭司長カヤバの前へ曳きゆきし時、祭司長は基督に向ひて『然らば爾は神の子なるか』と問ひ、然り、『汝等が言へる如く我は一なり』との答を獲るや、已が衣を裂きて叫ぶらく、何たる瀆聖ぞよ、彼口我から之を言へり、何ぞ他に證據を要めんや、其の罪たしかに死に當ると、遂に之を總督ピラト(Pilate)の手に交附せり。

斯く基督の神子たることは初よりして絶大なる反對を受けたる者にし

て、隨つて基督は有耶無耶の間に其の存在を夢想されしに非ず、實際に現存して衆庶の崇依する所となり、當時の祭司及び『學者』間に一大敵國と目せられてありき。勿論、上にも暗示せし如く、基督に隨從せる徒は、深く基督が神子(即ち眞正のメッシア)なることを信じをりぬ、剩さへ羅馬の兵士すらも、基督が十字架上に獻身の業を全うするに際して其の擧動の神妙能く天地を震撼せるを目睹するや、『嗚呼眞に彼は神の子なり』とてふ一同の歎聲に和したりし也。

此の時の光景を聖書の一傳には實に左の如く記載せり、即ち馬可著福音書第十五章に曰く

前略 十二 ピラトまた答て彼等に曰けるは然ばユダヤ人の王と爾曹が稱る者には何を我が處ん事をなんぢら欲むや 十三 彼等また叫びて之を十字架に釘よと曰ふ 十四 ピラト彼等に曰けるは彼なんの惡事を爲しや彼等ます〳〵叫びて之を十字架に釘よと曰ふ 十五 ピラト民の慊びを取んとしてバラバを彼等に釋しイエスを鞭ちて之を十字架に釘ん爲に付

せり十六兵卒これを公廳に携ゆき全營を呼集め十一彼に紫の袍をきせ棘にて冕を編て冠しめたり十八斯て曰けるはユダヤ人の王安かれ十九また葦を以て其首を擊かつ唾し跪きて拜しぬ二十嘲弄し畢て紫の衣をはぎ故の衣をきせて十字架に釘んとて曳往しが二一アレキサンデルとルフの父なるクレネのシモンと云るもの田間より來りて其處を通過りければ强て之にイエスの十字架を負せたり二二イエスをゴルゴタ、譯ば即ち髑髏と云る處に携來り二三沒藥を酒に和て飲せんと爲りしに之を受ざりき二四イエスを十字架に釘しのち誰が何を取んと鬮を拈てその衣服を分てり二五朝の第九時にイエスを十字架に釘け二六その罪標を拉甸、希臘、希百來の三語にてユダヤ人の王と書つく二七二人の盜賊かれと共に一人は其右一人は其左に十字架を釘らる二八これ聖書に彼は罪人と共に算られたりと云しに應り二九往來の者イエスを詬り首を搖て曰けるは噫聖殿を毀て之を三日に建る者よ三十自已を救て十字架を下よ三一

祭司の長學者等も同く嘲弄して互に曰けるは人を救て自已を救ひ能ず三二イスラエルの王キリストは今十字架より下るべし然ば我儕見て之を信せん又共に十字架に釘られたる者等も彼を詬れり三三第十二時より三時に至るまで徧く地のうへ暗なりぬ三四第三時にイエス大聲に呼りエリエリラマサバクタニと曰これを譯ば吾神わが神なんぞ我を遺たまふ乎と云るなり三五傍らに立たる者のうち或人これを聞て彼はエリヤを呼なりと曰三六一人はしり往て海綿をとり醋を漬せ之を葦に束て彼に飲しめ曰けるは俟エリヤ來りて彼を救ふや否こゝろむべし。三七イエス大なる聲を出して氣絕ゆ三八殿の幕上より下まで裂て二と爲れり三九イエスに對ひて立たる百夫長及び其の守兵等イエスが斯く呼り氣絕しを見て曰けるは誠に此人は神の子なり

然しながら基督が神子として基督教の信條(Creed)中に特記せらるゝに至りしは、紀元後第四世紀(即ち基督の降生後三百二十五年)の事にして、其の間といへども、種々さ

まざまの意見は四方に吐露せられ、往々異端邪説も主張せられて、教會内に時ならぬ風波をさへ惹き起したり。

按ずるに基督の神子觀に對して第一に異議を唱へしは、自然の勢として所謂エビオン宗徒(Ebionite)なるが如し。エビオン宗徒と稱せる一種の基督教徒は、最とも古き一宗派なりしが、例の所謂パリサイ派(Pharisees)とエッセン派(Essenies)より成り立ちし者なるが故に、ヨハネの洗禮に非常の重きを置き、(ヨハネはエッセン派中より出たれば)それだけ又イエスキリストを輕く觀じたれば、基督教徒にして、尚舊約時代の律法及び儀式を嚴守するの主義を持せしは、自然の數のみ。

今基督教會史を按ずるに、左の一項を其の中に發見す(著者の解釋に係る)

基督教會内夙にナザレ宗徒てふ者を生せしが、彼等の主張は、即ちモーセの律法は猶太出身の基督教徒には、遵守すべき義務ある者なりといふに在りとす。但　此宗徒とてもモーセの律法を異邦人に實行せんと

は欲せざりき。モーセの律法の一統　施行せらるべき者なるを極端に主張せし人々はエビオン宗徒(Ebionite)と呼びなされたり。ナザレ宗徒は第五世紀まで存續し、一般に正教派に屬せる者と見なされ、教會に於ても亦然か認められたりしかど、エビオン宗徒ば疑も無く異端なりき。

エビオンてふ名稱の出處につきては議論一ならず。或は云ふ、是其の創立者の名にとれりし者なりと。但し今は一般に是れ「貧者」てふ希百來語(Ebionim)より出でたる者と信ぜらる。而して其の「貧者」てふ名稱は多分元エルサレムよりペルラに移住せし基督教徒に與へられし輕蔑の名なりしならん。此の後ハドリアンエルサレムを滅し、該城の故址に新市府を建て、猶太人の其の新府に來り住むを禁せし以來、他の基督教徒は猶太の慣例を廢し、此の府に移りて異邦的基督教會を建立せしに、尚飽くまでも猶太風に拘泥してペルラに留まりをりし基督教徒ありしかば、特に此の名稱――エビオン宗徒――を此の後者(即ちペル

ラに留まれる猶太的基督教徒)に適用する事となりしなり。

神智派の人々と異にして、エビオン宗徒は主張して曰く、此の世界は神が親ら造りたまひし者なりと。而して基督の品位につきては、或る者は其の不思議なる誕生を信認し、或る人は基督の神なること及び其の無始より存在せし事を否めりと云ふと雖も、概して之を言へば、彼等は基督を以て單に人なる者とし、ヨセフとマリアの間に尋常に生れしが人々の中にて只彼一人律法を全うせしによりて撰ばれてメッシャとせられ神の子とせられたりと說けり。彼等は信ずらく此の高職分は彼も自ら知ざりしが、其のバプテスマを受くるときに、エリヤバプテスマのヨハネとなりて、之を彼に明かせり、而して彼は天の勢力を授かれり。但し此の勢力は其の磔死の前に彼の身を離れ去れり。

エビオン宗教は其の舊約書に對する意見に於て其の中に一致せざる所ありしが如し。或る者は謂へらく、基督教がモーセの律法に異な

るは只若干の新面目を之に增加したるに在りと。又或る者は謂へらく、基督教はモーセの制度が希百來聖書の中に謬謬せるを其の眞に復せしめたるものなりと。該宗中進歩のせる是等の人々は、モーセを以て唯一の眞預言者となし、曾に後世の傳說を棄つるのみならず、舊約書もペンタチウク(所謂五經)を除きては一切之を取らず。否ペンタチウクすらも彼等は之をモーセの直著とは認めざりき。彼等は之を報告者の筆に歸して曰く、彼等(報告者)は恣にまた知らずして、モーセの言を誤れりと。而して此の報告者の謬謬を口實として、ペンタチウク中己の意見と合はざるが如き部分をば悉く棄て去れり。新約書につきてマタイの希百來文の福音書を除くの外は何をも承認せざりき。否此の福音書に於てすらもキイエスの誕生の話は省かれたりと云ふ。彼等は種々の緯書(アポクリファ)に多く信倚せり、而して特に使徒パウロに敵對せり。

後代のエビオン宗徒は、道德上に腐敗せし所ありしと言はるれども、其の初代に於ては彼等の行狀は嚴正なりしこと疑なし。其の禮拜及び儀式に於ては彼等は猶太の慣例に則り、割禮を行ひ、禮式上の洗滌をなし、嚴にユダヤの安息日を守り、又シナゴグ(猶太風の敎會堂)及び其の宰(つかさ)など、凡て猶太在來のものを設けたり。彼等は無酵のパンを以て聖餐を執行し、杯には只水を用ひしのみ。

エビオン宗は、第四世紀の末までスリヤ(Syria)及びペレア(Perea)に行はれて廢らざりき。

エッセン派出身の自國基督敎徒に已に此の所感ありたる如く、他國出身の基督敎徒には又各自固有の哲學宗敎に基づける先入の偏見未だ全く去らず、取捨折衷の妄計頻りに動く者ありたれば、是亦一種の異端的基督敎を唱ふるの已むを得ざるに至りぬ、中に就て、波斯(ペルシヤ)出身の基督敎徒、即ちマニキ宗徒(Manichaeans)等に此の事の尤も熾んなるを見たり、基督敎會史を閲する

に、マニキ宗はペルシヤの出身に係るマネスてふ宗敎哲學家が基督敎を採りて多少折衷的に構成したる者とす、而して其の敎義に至りては殆んど鶴的基督敎にして、異端の稱は到底免るゝ能はざりし也。傳に云く——

マネスがペルシヤに其の說を傳へ始めしはアウレリアン帝の治世の間にして、多分二百七十年頃なりしなるべし。彼の生活及び言行につきては許多の異說あり。或る傳に云く、彼は法術士(マジ)にして、基督敎に信從し、已の最初の敎を脫して其の新敎說をペルシヤに宣べたりしが、他の法術者輩と議論を鬪はせて之を辯倒する能はざりしかば、殘酷なる死刑に處せられたり。マニキ宗は許多の點に於て神智敎(グノスティシズム)系の或る者に似たれども、其の類似は毫も直接の關係より起りしに非ず。是れマニキ宗と神智主義とに通有なるペルシヤの元素より生せし者とす。マネスは猶太の古傳よりも希臘の哲學よりも何の感化をも受けず、ゾロアストル敎と基督敎より幾分を借りて其の敎系を成せし外

に、亦佛教よりも大に借りて之(教系)を完成せしと想像せられたり。蓋し佛教をば彼其の生國にありて學びしならんも知るべからざるなり。

マネスの教系は純然たる二元教なりき。彼即ち教へて曰く、茲に二箇の並存せる無始無終にして又相互に獨立なる力あり。其の一は善なる者、其の一は惡なる者なり。其善なる者は基督教徒の所謂眞神に當り、其の惡なる者は基督教の神學に於て惡魔と稱する所の者に當ると謂ふべし。彼等は言ふ、人類は此の二者の爭鬪裏より生せし者にして、靈性をば其の一より稟け、物性をば其の他の一より稟たけりと。該宗には救贖の事を教へず、如何となれば神靈なる魂は失はることある能はず、物質なる體は救はるゝことある能はざればなり

人々の靈魂を其の下界の牢獄(此の世の惡魔の權力)より救はんが爲に、神は自身の體質中より基督と聖靈の二物を生じ、此の地を以つて戰爭の場となしたまへり。是に於て基督遂に此の土に降りて救の道を

宣べたまひ、而して暗黑の君(魔王の類)ユダヤ人を唆かして基督を十字架にかけたり。但し基督は只外形(外見)に於て此の刑を受けしのみ。訓慰者(パラクリート)をおくらんとの約束はマネスの身に於て應驗せり。彼は即ち教會を圓滿の眞理に導くべき者なり。

猶太人の神(――マネスは之を暗黑の君と同一物視す――)を棄て、基督とマネスの道に遵ふ人々は、終に解脫を得て救はるべし。

斯の如く、基督の性質は初よりして議論の焦點となり來りしが、基督教會は次第に增大膨脹して殆んど全羅馬帝國に瀰漫れるや、其の中に包籠する所の人民愈よ衆多にして、淸濁併せ收めたれば、人傑の輩出すと同時に異說新論ますます夥しく、往々獅子身中の蟲なる者をさへも生ずるに至り、殆んど拾收すべからざらんとせしかば、羅馬皇帝大コンスタンチン(Constantine the Great)大に之を憂へ、遂に紀元後三百二十五年五月を以て全帝國の監督大會を小亞細亞の尼契亞といふ邑に召集し、茲に基督教の主義綱領を議定せしめ

たり、之を尼契亞信經と號す、爾來正統基督教會に於て普く遵奉せらるゝは即ち此の信經なりとす。

其此に至りし所以を稽ふるに、基督紀元二百七十年頃を以てアレキサンデリア邊に生れしアリウス(Arius)といふ大宗教學者一種の新說を唱へ出して三位一體觀を排斥し基督を以て單に一聖人に過ざざる者と爲し、其の一世を壓倒する聲望を以て此の異說を傳播せしかば、其の信受せられ、採用せらるゝ極めて廣く且大なる者ありたり。是に於て當時十字架の旗章を以て天下を征服せるコンスタンチン大帝は其の大權を發動して斯の統一事業を完成したる者とす。恰も阿輸迦王の治下に佛教の統一大會召集せられたりし如く、尼契亞經は即ち亦基督教の柱礎として今日にまで屹立せり。基督の神子觀茲に始めて天下一般に信認せられ、異議を唱ふる者は王侯といへども始んど世に立つ能はざらんとす。

夫れ基督の神子觀は此の如くにして漸く確立せり、決して論者の言の如

く初よりして基督は夢相的に神子視せられたりし者に非ず、眞理と非眞理の戰鬪甚だ酣にして、遂に茲に歸着せし而已。故に基督の出生を受肉降誕(Incarnatio.)と稱す、肉體を受け、人と成りて此の世に生れ出でしを謂ふ、決して幽魂の如く、鬼神の如く、冥裏に存在せしことには非ず。

抑も此の尼契亞大會は基督教が始めて一定不動の教系を取りたる至極重要の事實なれば、一は一般の讀者諸君に耳新らしき基督神子觀的論爭の梗概を明かにすべく、一は下に引ける人幸德氏の雷同的暴論を遮するべく、左に余輩の嘗て譯述せる此の段の一略史を掲げ、併せて夫の尼契亞信經其の物をも亦特記すべし。

アリウス宗(Arianism)の特異なる教說——救主の神たることを否む事——は、已にエピオン宗徒の異端、及びアルテモン又はセオドタスの異端の中にあらはれたりしものなり。然れども基督教今は新しき地位を占めたるが故に、教義上の疑問は以前に無き大激動を生ずることと

なりぬ。アリウス爭論及び之に次いで起りし或る爭論の如きは、唯全基督教會に偏く感せられしのみならず、又政治上にも重大なる影響を及ぼせり。然れば斯の如くにして引起されし慣闘紛擾を考ふれば慨歎に堪へざるは疑なしと雖も、玆にまた我等が忘る可からざる利益の存するあるを見る、即ち他なし、是等の爭點を互讓に由りて淹沒せんと務めずに公然と論戰せしに因りて、基督教會は一定明確なる健全の言詞を多く得るの幸にあへり。是れ其の後に從ひ起りし無智暗昧なる幾多の世代を通じて基督教の信仰を保存する爲に極めて大なる價ありしものにして、又實に必要なりし者としも謂つべし。アリウス宗の生處はアレキサンデリアなりしかども、該の異端の濫觴は寧ろ東部の今一つの大教會――――嘗てサモサタのパウロが甚だ強き久しき感化力を與へたりし教會――に溯り求むべきなり。アレキサンデリアの傾向が靈的又神秘的なりし間にアンテオケの神學者は敏辯上の剖析に

耽り、精神の大若くは深よりは敏慧尖利を以て著れたりアンテオケ大學者ルーシアン(Lucian)の學派の中に盛んなりし調子は實に是の如くにてありき。彼その若き時は彼のサモサタのパウロに聯りをりしが、後に翻りて正統の教會にたちかへりぬ。彼れ基督教會の内に殉教者として崇めらるゝにも拘はらず、彼が教へし所の説は毒害を流すの種となれり。アリウス宗徒は彼を以て已等の鼻祖となせり。彼の門弟の中にはニコメデアのユセビウスあり。又該黨の領袖として名高くなりし人々ありアリウス自身すらも其の門人の一と算へられ來りぬ。然れども其の關係の有無は甚だ疑はしと見ゆ。

アレキサンデルがアレキサンテリアに監督たる第六年、即ち紀元三百十九年に、麾下の教師にむかひて三一神性の無上なる奥義にかゝはる頗る長き演説をなせり。彼れ主張して曰へらく、御父の御子とは一物一體にして、其に威德また同等なりとアリウス時に該府の長老に列

して勢望あり、謂へらく、是れ彼の三身を混同せしサベリアスの異端――アレキサンデルの先行者中の最大なる者の一人ダイオニシアスが排擊せし所の異端――に歸着すと。因て此の說を辯駁せり。斯くて彼進んで論じて曰く、御父は御父たり、御子は御子たり、故に御父は御子に先だちて存在せし者ならざる可からず。故に嘗て御子は存在せざりし時あり。故に彼は一切の受造物の如く初に無かりし材質を以て造られし者なり。

アリウスが敎へし所の大要は是なり。彼れアンテオケの敏辯論法に薰陶せられし上に、其の性亦傲慢不恭なりしかば、何事にても推測式の範圍內に入る能はざるほどに高妙なる者は無しと常に思ひ慣れたり。彼が本據とせる所は全く斯の如き推測法は彼の無極なる者を色括し得ると斷定し、人子を推して神子に著々論じ至り得ると速了せるに在りとす。然れども此の論は深思熟慮し來れば是れ自滅的なる者

のみ。如何となれば是れ我等の生が神子たる事の眞理を主張するに始まり、彼を全く御父の本質より異なる者となすに終ればなり。アリウスは其の說を公然と宣ぶるに先だちて竊に之を弘めつゝありしと見ゆ。初め監督(ビシヨフ)アレキサンデルは面議を開きて本問題を論じなゞ、じて彼を挽回せんことを務めたりしかども、毫も功なかりき。是に於て該監督は――既に寬貸に過ぐるとの非難を蒙むりゐたりしなれば――已むを得ずして敎會の譴責を使用するに至りアリウスの敎說を斥けて不度なる者となし、彼に其の說を取消さんとを要め、其の拒むに及びて之を敎會より放逐せり。斯くてアレキサンデル師はアリウスの黨派員に一書を送りて正敎に歸順せんことを勸めけるが、長老と執事の大多數この書に連署せり。其の執事の中には二十四歲ばかりの一俊髮ありき。彼は敎會の役務に任ずる爲に小心に敎育せられ、已に異邦人を駁する論說と耶蘇の降誕を論ずる著述とを以て名を知られたり。

其の名をアサナシウス(Athanasius)と云ふ。

アリウス放逐せられて後、アレキサンデリアに止まる能はずしてパレスタインに退き、是よりして書翰の往復繊るが如くなりき。――アリウスは其の過激なる意見を蔵うて偏く友を得んことを務め、アレキサンデルは彼(アリウス)に對する警戒を四方に散布し、仲裁人の和解談を悉とく拒めり。彼等(仲裁を試みし人々)の中にはユセビウスもありき。彼は嘗てルーシアンの弟子たり、今はニコメデアの監督にして、コンスタンスイン帝の信任を得てをりぬ。アスリウ此の野心家に訴へて曰く、我は御子の無始無終なることを否みしに因て法王アレキサンデルの爲に非道なる迫害を蒙れりと。彼乃ち主張すらく、御子は假令「完全圓滿なる神」と稱ふるを得べしとすとも、一箇の受造物たらざる可からず。

有名なる歴史家にして、カイザリアの監督たるユセビウスも亦アリ

ウスが頼める監督の一人なりき。如何ほどまで彼がアリウスの説に贊同せしかと云ふに至りては、議論なきに非ずと雖も、「彼の行爲は彼が精神の告白なり」と謂うて可なるべし。否彼はまた基督は神に非ずと明かに言ふことを躊躇せざりし也エルサレムのマカリウス、アンテオケの監督長ヒロゴニウスはアリウス主義に對して肯て何をも言はざりき。アレキサンデルは幾度かスリアの監督輩に書を送りしが、其の中の或る者は彼の意見に同せるが如き答をなし、他の者どもはアリウスに贊成する旨を明言せり。但し假令パレスタインは向背疑はしかりしとすとも、ニコメデアはアリウスに與せり。彼處にて彼はユセビウスより歓迎せられたり。後者は乃ち彼に書を送りて曰ひけらく「子の意見は佳なるが故に、請ふ萬人が之を採るに至らんことを願れ、如何となれば創造せられたる者は其の生出前に存在せざりしと云ふことは何人にも明かなるが故なり。」

アリウス及び其の同伴者はニコメデアより彼等の大監督(即ちアレキサンデリアの監督)に一書を送れり。彼等は恭しく彼を彼等の「多福なる法王」と稱し、而して彼自身の所謂教に論及せしが、御子を論じては彼は「神の完全なる受造物なり」と曰ひたれども、「受造物の一なり」とは曰はざりき。彼等は確言すらく、御子は御父の體質と同一なる者に非ず——是れ唯物主義の邪見に落つべければなり。曰く、彼「御子」は一切の時よりも前に生産せられたり、然れども尚始は存在せず、後に成り出でゝ存在するに至りしなり。故に彼は其の未だ生産せられざりし前には存在せざりき。ビヲニア(Bithynia)の監督輩は、ユセビウスの指導に從ひてアリウスを已等の親交を受くるに足る者と稱へ、四方の監督衆に回狀をまはして、アレキサンデルとアリウスの朋友との間に入りて仲裁せんことを之に求む。時にアレキサンデルは諸の一統教會監督に通知書を發し、其の中に該分裂派の來歴を

述べ、アリウス持説を列記し、聖書の本文を擧げて一々に之を辨駁し、聖書の預言を掲げ出して、信者の忌まざる可からざる異端邪説の起る事を説けり。彼は其の長老及び執事をして、嚮にアリウスの黨派に與へし書に連署せしめし如く、今此の書にも亦連署せしめたり。

ニコメデアに於てアリウスは其の「タライア」(Thalia)を著述せり。是れ即ち重に詩句を以て成れる書にして、其の音調は甚だ忌はしき關係(聯想)を有せる者なりき。此のタライアてふ書はアリウス宗の教説を食事の餘興として歌はるべき歌曲の中にまで含めて之を弘めん爲に作りしものとす。同樣の目的を以てアリウスはまた、曰ひく者、船ごく者、路ゆく人などの爲に歌を作れり。當時其のアリウス宗徒の不恭不敬として、商店に於ても、浴堂に於ても、喋々御父子同等の見を喇り、また市場にありてすらも、無始無終の御子とは何等の奇怪ぞやなど言ひて婦人小兒までを冷罵せし、褻瀆は主として是等の著作より起れり。斯

て後アリウスはパレスタインに歸り、カイザリアのユセビウス及び其の他の衆監督の許可を得て此に一種判然別異なる敎會をつくれり。其の條件たるや、彼アレキサンデルと和解することに畢生の力を盡くすべしといふにありき。此の許可の事はアレキサンデルがビザンチウムの同名人(アレキサンデル)に書き送りし長き書翰の中に論及せられてあり。此の書翰は彼がアリウス宗を辯駁する爲に書きし許多の書翰の性質を代表するものとしも謂つべし。彼はアリウス黨が異敎徒及び猶太敎徒の見を以て基督を解くを排斥し、其の迫害に類する暴行を逞うするを非難し、其の傲慢及び僭妄を筆誅せり。彼は無始無終の御父と無始無終の御子を敎ふる說を固持し、御子の御子たるは其の本體より然るものにして、子に非ざるものを子とせられて然るには非ずと主張せり。此の敎說は毫もサベリアスの邪見に落ちず、毫も二元說の過ちをかさず、決して神の本體を分つ者に非ず、決して御父が生產

せられざりし者(自然にして在る者)たる威德を損せざるなり。此の書翰の中にて一點の奇なる者は、マリアを「神の母」と稱へしにありとす。人間の語が超絕勝妙なる奧義を十分に言ひ顯はすに足らざることを說けるも亦著しとす。案ずるにアレキサンデルは玆に一種の信經を作りて、ビザンチウムの監督に贊同を求めたるものなるべし。

コンスタンタイン帝、東方を統ぶるに及びて見しに、基督敎會は今方に新に起れる議論の爲に擾れつゝありき。彼が第一の目的は前にも言ひし如く、國家の治安を保たんとするにありしに今、其のドナトス宗徒を漸く處置し了りし後、忽ちまた更に廣き、更に烈しき分爭が東方に熾んなるを見しかば、痛く失望しぬ。帝そのアレキサンデルとアリウスとに與へし書翰の中には自然に其の「平安無事の世」を切望する旨を論せり。然しながら彼がまた其の宗論の眞義を明かにせざりし事、及び其の帝權を以て此の議論の是非を決し得るとの自信を懷きを

りし事も其の書中の辭にあらはれて見ゆ。彼乃ち言ひけらく、此の爭は一方が挑發し他方が擯斥せし無用不急の疑問より起りしなり。彼等請ふ斯の如き智力上の練習を縱まゝにせざれ、請ふ少て之を公けにすることを謹めと。該書翰の中に帝は七次も主張して曰ふ、本爭點は些細にして錐刀の末なるのみと。而して彼等を諭して言ふ、凡て肝要なる點に於ては彼等相一致す、然るに何ぞ十人十種なる理論臆說につきて基督敎の社會を分裂せしむることをするやと。

斯の如く實際家——敎義上の是非などは馬耳東風たる實際家の精神を以つて、コンスタンタイン帝は、基督は神と一物一體なるや然らざるやとの疑問を全く不緊要なるものとして度外に置きぬ。彼コルドバの監督、老證道人ホシツス(Hosius)を以て此の書を送りしが、ホシウスが三百二十五年の初め頃アレキサンデリアに到着するに及びて、再監督會議かしこに開かれたり。アリウスは復たも罪に定められき。

パレチアスの謀叛黨も亦然り。該會議は本爭論に對せる帝の意見をも採納ざりしのみならず却つて更に一歩を進めてホモウーション(同質)といふ名辭を採り用ひ、御子は御父の身位の中に混滅する事なしに、御父の本體の中に含まれいますとの大眞理、——御子は眞の神にましまし、生れはしたれども造られはせず、文字のごとくに、全然眞箇に、無始無終に、神たる者にていまし、との大眞理を言ひあらはさん爲に之を用ふる事となりぬ。

アリウスはコンスタンタイン帝に諫爭の書を上れり。然るに帝は此度は前の告諭書を作りし時とは異なれる勢力に支配せられつゝありしものの如くに、斷然彼(アリウス)に答へて、御子を御父と一物一體なる者と認むべしと命じたり。

コンスタンタイン、今は始めて彼の爭論の種たる敎理が極めて高大に、極めて重要なる者なることを了れり。且又アリウス宗徒は國安を

擾す者の如くに彼に見えたり。今は地方の監督會議も帝の命令も此の時の必要に應ずるに足らざりしこと明かなりき。是を以て此の紛議を落着せしめ、併せて又復活祭の日につきて近頃再び起りたる爭論を調停せん爲に、一切の監督を悉くビテニアのニケアに召集して一般會議を開けり。是の如き集會は今始めて出來べきものとなりぬ。如何となれば今までは東部と西部とが基督教を奉ずる一帝の治下に統合せられしこと絶えて無かりしが故なり。而して又此の召集は是非とも帝權より出でざるを得ざりき。是れ帝國内の一切の基督教徒が齋しく認めたる唯一の權力なりければなり。

此の大會議は三百二十五年の六月十九日に始まりぬ。出席せる監督の數は通例三百十八人と算せらる。羅馬の監督は年邁みをりて斯かる遠路の旅行をなすに堪へざりしかば、己の名代として遣はせり。アレキサンデルは其の執事アサナシウス(Athanasius)を將て來り會せ

り。ノベーシャン宗の一監督も亦ありき。彼はコンスタインが一致を望み其の長も二人を將て特に招きたりし者なり。アリウス黨員の中にはニコメデアとカイザリアの兩監督もをりぬ。又嚮に廢せられたるアリウス派の監督中の二人も出席することを許されたり。實に是れ以前の一切の裁判を悉く再審するの權をもてる大會議なりき。此の外緇素兩方の人々にして來たり集まれる者甚だ夥しくして、之が景色を一層壯大ならしめき。彼等は議員としてに非ず、傍聽人として出席せし也。但し其の中には意見を議場に吐露することを許されし者もありき。何れの監督が此の會議に議長たりしかは疑はし。假令ホシウス議長たりしとすとも、是れ彼が羅馬の監督の代理たる資格に於て然かせし者なるや否や詳ならず。要するに、彼は只信經を制定せる間だけ議長の席を占めしのみにして、實際の議長はアンテオケのユスタテウス(Eustathius)なりき。帝の未だ到らざりし前に、該會議員はニ

ケアの大教堂に會議を開けり。アリウス召喚せられて審問せられしが大膽にも明言して曰く、我は固く持す、御子は受造物にして、嘗て存在せざりし時あり。神これを無より造り出し給へり。彼は神に逆らひて罪を犯さんと欲せば犯すことを得べしと。說きて此に至るや、議場は悚然として寒心し、耳を掩うて既に足れりと呼はれる監督輩も多かりしが、他の監督輩は十分に審問を盡くさんことを主張せり。本會議員として、又は發言權をもてる參列者として、正統教會の爲に辯を振へる人々の中にては、執事アサナシウス最も卓越なる者なりき。

七月の三日に會議は宮城内に移さる。コンスタンタイン帝金紫の盛服にて——但し護衛兵の壯麗をば具せずして——出御せられコスタテウスの誠忠なる奏詞に對して温顏柔語を以て答へられ、衆議員の辯論に始終耳を傾むけ、監督衆に號令せんとの念をば露ほども顯はさざりき。アリウスは再び審問を受けたり。ユセビウス派(——彼等は

ニコメデアの監督ユセビウス黨派なりし故に然か呼ばれ始まりぬ——)はアリウスを辯護せんと試みけるが、多數者より辯明を要められし時に、其の陳べたる所區々にして互に相撞着せり。之に反して正統教會員が取りたる針路は左の如し。——「我等は其の受托の正教義を固く保たん。其の各教會にて奉ずる受洗式文の信仰箇條を以て使徒の眞の教誨となし、聖書の眞の意義となし、一切の新說の眞の試驗標準となさん。」是を方針として進みしに、救世主を以て神とする事は、世界を教化せし信仰の道なること明かになりたれば、諸監督は、聖書の詞を以て聖書の意義を言ひあらはさんことを欲して(若し斯るものにして目下の急需に應ずるに十分ならんには)、救主を「神より出たる」者と稱へんと發議せり。然るにユセビウス派員は陽に之を可とせり。如何となれば「萬物みな神より出ればなり」、次に正統教會員は進んで言ひけらく、「彼は神の權能(ちから)、父の象(かたち)にして、常に彼(父神)に賴て在す」

と。ユセビウス派員は是にも亦彼等自身の意味に於て同意を表せり。其の意に曰く「神の權能」てふ語は天使にも人々にも、否また皇にも當て用ひられたるものにして、人類は即ち神の象なる者なり。彼に賴て我等は在ることを得何者も我等を神の愛より離らすることを得ず」と。正統教會員また主張して曰く「彼は即ち神なり」と。ユセビウス派員答へて曰く「善し彼は然か造られしなり」と。是に於て諸監督は左の如き本文を引けり。曰く「彼は神の榮の光輝その質の眞象なり」(希百來書一の三)、「我等は汝の光によりて光を見ん」(詩篇三十六の九)、「我と父とは一なり」(約翰福音書十の三十)、而して、其反對者が聖書の一切の語句をことごとく猶豫なしに解き去るを見しかば、終に彼等は「神の質より」及び「神と同一質なる」てふ句に聖書の意義を集中して爭へり。之を要するに、彼等はホモウーシオン (H mo usion 即ち父子同質) の極めて必要なることを信せし也。此の際、カイザリアのユセビウス之(ホモウーシオン)を

戴せざる信經草案を呈出せしに、其の信仰箇條は不完全なる者として排斥せられたり。又ニコメデアのユセビウスもホモウーシオンを以て明かに不條理なる者となせる一文を朗讀せしか、其文は引き裂かれたり。

偖該會議は此の語(正しく御子の究竟神性、即ち彼が眞箇に神子たる事を言あらはせる者)を採用するに決せしかば、ホシウス及び其の他の若干人に委任して正統の信經を起草せしめしが、其の結果として今日に存ずる者は大要左の如し。

尼契亞信經

我等は獨一の神、全能なる御父、顯幽の萬物の造主を信ず。我等は獨一の主イエス、キリスト、神の御子、御父よ

り生れし獨子、即ち御父と一物一體なる者、神よりの神光よりの光、眞に神なる者より出でゝ眞に神なる者造られしに非ず、生れし者、御父と同一質なる者、天地の萬物を造りし者、我等人々のため、又我等を救はん爲めに天より降り、肉體をとりて人と爲り、苦を受け、三日目に甦り、天に昇りたまひし者、後また來りて生ける者と死せる者とを審きたまはん者を信ず、我等はまた聖靈を信ず。

但凡そ縱まに臆說を造うし、キリストは嘗て在らざりし時あり、彼其の未だ生れざりし前には在らざりし、彼は無より有に造り出されし等と曰ふ者、または「神の御子は神と體質を異にす、創造せられたり、不變不

滅なる者に非ず」等と曰ふ者は、使徒傳來の一統敎會より放逐せらる。

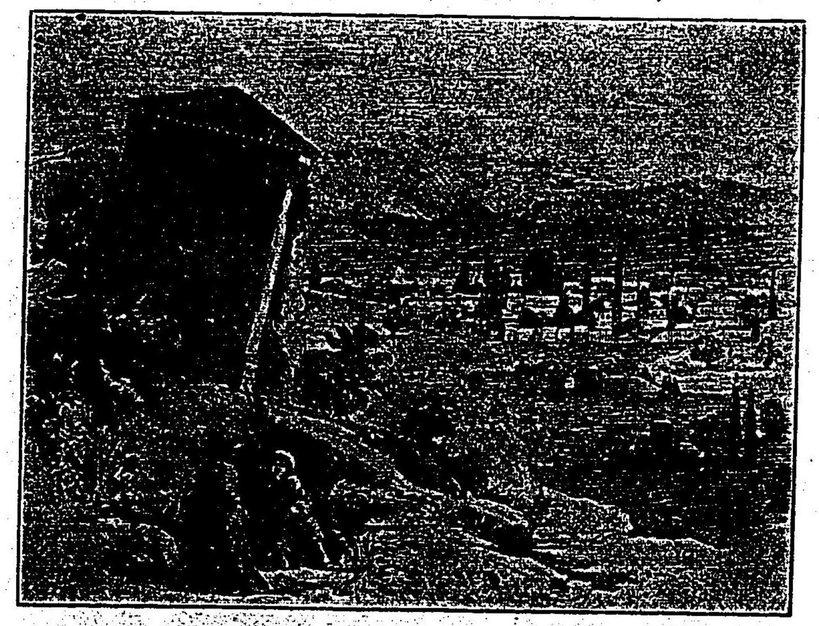
アリウスと臭味同じうせる十七名の監督は此の信經に記名調印する事を拒めり。カイザリアのユセビウスも其の中にありしが、熟考の後遂に服せり。但し彼は尙甘心せざる所ありたれば、後に至りて評して言ふ、此の相定めし詛文は「聖書の中に見えざる者にして、混雜を惹き起したり」と。他の異議者(十七名の監督者)も亦政權の處罰を懼れて屈服せしかば、果は只二人を餘せし而已。是等の二名はアリウスとともに罪に定められき。彼等の謫處はイルリリア(Illyria)なりき。

斯の如くにして督基敎會は幾多平和の世紀を樂しみ來りしが、十八九世紀の交に至るや、聖書批評の方面よりして再び基督の神子觀は大波瀾を捲き起し始ぬ。

然るに『基督抹殺論』の著者幸德氏は、非正統的論師或は自稱唯理論者(ラショナリスト)輩の讒誣若くは惡口を其身其儘に妄信し、非常の毒筆を揮ひて、該大會を誹謗

せしは、抑も何の爲にする所ありて然りしや。不審し。

按ずるに、ニケア（或は眞ニカイア）は昔し小亞細亞に於ける有名の城府にして、イズニク湖畔大厦高樓甍をならべ、環らすに二重の牆壁を以てし、幾多の崇塔は屹然として天に聳え雲を凌げり、三百二十五年に於て玆に例の大監督會議開かれしのみならず、七百八十七年には更に又、一大宗教會議の開かれたるあり、而し



古ニケア府の墟址——今は一小漁村

て一千九十七年には泰西十字軍先づ第一に此の城府を征服せり、眞に宗教に多事なる都會にてありき。然るに今日は土音イズニク（Iguik, or Isnik）と呼び、英音にニース（Nice）と稱す、寧ろ寂寥たる一漁村のみ。觀者をして今昔の感に堪へざらしむ然れども重牆高塔城門等依然として粗舊觀を存すれば亦是れ天下の漫遊家をして坐ろに古の盛時と其の偉業とを偲ばしむ。

幸德氏は荐りに『大英百科全書』の記者を振まはし、彼を以て殆んど唯一の大オソリテとせられしが、彼れウエルハウゼン（Wellhausen）は實は今や既に白壁の幽靈然たる獨逸自稱唯理派の殿にして、燈の將に熄滅せんとするや先づ倍して明るく成るにも比すべく、確に掉尾の大高等批評家なりと雖も、奈何せん其の所論既に已に陳腐にして舊廢に屬したれば、バウルやストラウスを先陣とし、ウエルハウゼンを殿軍と爲せる幸德氏の『高等批評』は、御氣の毒ながら、亦同じく陳腐にして、彼が今日の思想界に於けるは、白壁の提灯に類すべく、善くとも日中の電燈にや彷彿たらん歟。幸德氏乃ち基

督教の教義を曖昧模糊たる揑造物なるかの如くに譏貶し、例の詭辯的高等批評家を奉戴し、說を爲して曰く、——

『大英百科辭書の記者は謂へらく、是等宗教會議が「教會の戰場」と呼ばれしは其の實に協へり。ニース會議までは何等の定まれる信條あること無く、皆各自特殊の物を有したりき。而して同會議は、命令を發して永久の信條を決定したり、而も信條は四百五十一年カルセドン會議に於て更に擴張せられ、次で五百八十九年のトレド會議に於て又も他の變更は加へられたりと。同記者は更に新約の批評に關して、一派の有力なる批評家が新約の大部分を僞作と爲せると實際保羅の四大書を除くの外、新約の各書孰れも疑點を存すると、二世紀の中頃までは、諸教會に用ゐし經典は眞假玉石混淆せしと、三百六十年ラオヂセア會議に於て、不經と認めらるゝ或る文書を用ゆることを禁止せることを曰へり。如何に今日の聖書が長日月の進化若くば退化の歷史を有するを知る

可からずや。

而して此等累代の宗教會議が、彼等經典を鑑別し其信條を選定するに當つて、果して如何の權威を有せしかを見ば、何人も啞然として一驚せすんばあらず。

此等會議の最も有名なる者をニースの會議となす。是れ紀元三百二十五年コンスタンチン帝の召集する所、會する所の正直なる監督三百十一人、耻辱にも當時尙ほ異教徒たりしコンスタンチン帝は之が議長たり。ヘラクレアの監督サビナスは曰く、『當時會する者コンスタンチン帝とイウセビアスを除くの外總て是れ無識の者共の群集なりき』と。

見よ此尊敬すべき一團は何を爲したりや。彼等は先づ此團體が神聖にして過誤なき者也と宣言したるに拘らず、彼等の信條を決し、經典の眞假を議するや、直ちに罵詈讒謗喧嘩爭鬪の大醜態を演じ、皇帝は議

場の整理の爲めに遂に武力を用ゆるの已む可からざるに至りたりき。

ドクトル、モシエームは曰く、「ニース會議及び其他の會議に於ける爭論は、非常なる無識と思想の甚しき紛亂とを示したり。會議の意思は多數決に依て決せられたり、此多數を得んが爲めには術策譎詐到らざるなく、賄賂暴力を用ゆ。をすら避けざりき。敎會の利益の爲めには詐僞も亦た善行なりとせられし也」と。宣なり、皇帝が此失態を隱掩し去らんが爲めに、此會議に關する一切の記錄を燒棄せしめしとや。

或は曰く、當時其眞假を鑑別せんが爲めに提出せられたる諸書は、盡く之を聖餐の卓下に置けり。而して會衆皆な神に祈りて、靈感に成りし書を卓上に上らしめ、僞經を卓下に殘し玉へといふや、神は之を聽きて、爾く爲し給へりと。基督徒中、今日猶ほ如此く信ずるの徒或ひは之れ有る可し。

ニース會議は如此き信仰と努力と、且つ皇帝の威權ある援助とを以

て、其萬世不易なりとする福音書其他の經典を決定し、基督が神と同體なるとを決定し、嚴格なる宣言を發したりき、所謂「ニース、クリード」なる者也而して此嚴格なる宣言すらも甚だ功あると能はず、幾世紀間同一の爭鬪は繰返されし也。

四百四十九年のエペソ會議の如き、亦た滑稽醜辱の甚しき者なりき。會する所、三百の僧徒に加ふるに一群の兵士あり。騷擾は例に依て甚しく、コンスタンチノープルの監督フラヴィアナスの如きは他の監督の爲めに毆打されて死したる程なりき。而して此會議は、同じく僧侶の叫喚と兵力とに依て四百三十一年エペソ會議の決議を覆へし、基督は一體一質なりと宣言せるも、此宣言も又もや四百五十一年カルセドン會議に於て廢せられ基督は再び一體二質を兼ぬる者となれり。「大英百科字書」に依れば四百四十九年の會議は世に『强盜會議』と稱せりと、以て其眞相を察す可からずや。

ジョン、チンダルは曰く「我等こそ既に整備せる經典を有せるも、其編輯に際して此等の經典を無數の虚僞なる文書より鑑別選定せんとは大なる勞力、困難、責任の事業なりき、此時代は僞作を以て充ち滿ちたりき。善良なる人々すらも自ら此敬虔なる詐僞を敢てしたりき。彼等は基督教の教義が斯くして速かに弘通せらるべしと信じたれば也」と。然り、教會歴史の父と稱せらるゝイウセビアスの如きも亦た僞作家の巨擘なりしと傳へらる。

チンダルは又た曰く「一方に福音書あれば又た之に反對の福音書現はれ、一方に傳道書あれば、又た之に反對の傳道書出づ輕浮なる者あり無趣味なる者あれば、高遠にして小説的なる者あり、殆と同一のオーソリチーを價ひする者にして、或は正經となり或は僞經とせられたり」と。而して之が調査に關しては彼は曰く「猶太人基督教徒と異邦人基督教徒と孰れに在ても茲に或論據若くば、證左の必要なる場合には、其爭點

に適合すべき文書は、直ちに發見せられき。而して大擔にも之に附するに使徒の名、若くば使徒と同時代のオーソリチーの名義を以てして憚らざりき。目的は手段を神聖にす、多くの證據は勝手に製造せらるゝが故に、毫も不足を感せざりき。斯くて基督教の世界は、啻に不經の文書を以てのみならず、不經ならざる文書の曲解を以て搖廻されき、而してノスチックの一派は起れり」と。』

勿論人生の最大事件と信ぜる者を二三百人相集りて議定する際に於てや、情熱し語激し、時に或は鐵拳飛び、時に或は武裝見えん。是は決して然か漫畫化して攻擊すべき件にあらず、諸國の議會に於て國家の重大問題の討議せらるゝ時は、其の狀果して如何、我が電車市有問題の東京市會に討議せられたる時すらも、政府は共力を以て市民を威壓したりとて、針小棒大的に喋々政擊せられしに非ずや。反對黨側の記事は殊に以て誇張に失し易ければ、讀む者に於て多少の割引を加ふるを要す。觀じて此に至れば、蓋し思

の半ばに過るものあるべし。但し最後に幸德氏がチンダルを引きて、

『斯くて基督教の世界は、啻に不經なる文書を以てのみならず、又不經ならざる文書の曲解を以て搔廻され、而してノスチックの一派は起れり』

と異端傳播史めける話を物せるは、是亦甚だ事實に違へるものなれども本章は既に餘りに長くして餘白なれば、他章に於て更に論及する所あらんとす。

因に一言しておかんに、幸德氏は新約聖書の決定をも右のニケア會議に於て行ひし如く喋々せらるゝ雖も、我聖か上統派の穩健なる教會史として掲げしものに見えたる如く、實際は然る亦なかりし也。該會の目的は專ら基督の性質を討究し、以て一般普行の信經を作るに在りしものとす。

第三章　沙翁（シエークスピーアル）と基督（キリスト）

非英雄崇拜的慳吝心

抹殺論者は往々また說を爲して曰ふ、基督若し果して聖書に記載されたる如き大活動を猶太の國中に、又其の首府エルサレムに爲したりしならば何が故に當時の史家或は學者は其事蹟を各自の著書中に特筆大書せざりしや。少なくとも基督と粗時代を同じうせるアレキサデリア府の猶太哲學者フイロ（Philo）や、聖パウロ（Paul）と粗同時代なる猶太の大歷史家ヨセフス（英音ジョセフアス）Josephus は、必ず之を知りて、前者は其の哲學書中に、後者は猶太古今史中に、之が委曲詳細を特記したりならん、然るに事の茲に出でざるは最も不審しくして、畢竟基督の存在せざりし事を證明すと謂はざる可からずと。

我が幸德氏は、先づセネカ、プルターク、ストラボー（Strabo）等の希臘著述家

が基督の事を毫も記述せざりしを意味ありげに怪しみつゝ、遂に說を進めて右のフヰロやヨセフスや又はタシタス、スウエトニアス等に其猛烈なる筆鋒を移し、縱橫熱罵冷笑を極めたり、今之を抄記せんに、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『更に當時の史傳に於て、基督の事迹を探討せんとせば、吾人は却つて哲人ヒロー(Philo)に逢着せざるを得す。

ヒローはアレキサンドリアの猶太人種にして紀元十年乃至廿年の頃に生る。プラトー派の碩學にして、足跡殆ど羅馬領土に遍ねく、羅馬の帝王政治家と談論し、エルサレムの博士等と交りて、哲學宗教に關する浩瀚の著述あり、其名一代に重きを爲せり。而して、紀元三十九年乃至四十年の頃、帝王を神として崇敬するの詔勅に抗議せんが爲め、猶太人より擇まれてカリグラ帝の朝に使ひせしの時、白頭の老人なりしと

いふを以てすれば、彼れや基督の前に生れて基督の後に死す。基督が年十二にしてエルサレムの賢者等を屈せしめし時は彼れ年既に三十歲前後にして、基督が盛んに奇跡を行ひ、福音を宣べ、救主と尊ばれ、亂民と罪せられ、十字架に處せられ、天に擧げられ、晝暗く地震へるの時は、五十前後の賢哲なりし也。而して彼れの種族にして、彼の地位にあり、常に其同胞の哲學宗教に關して注意研鑽の懈らざるの人にして、基督の如き人若くば神を知らざるの理なり。假令面のあたり基督を見ざるも、疾く之を聞かざるの理なく、聞て之を研究し、且つ之を記錄評論せざるの理なし。而もヒローは其浩瀚の著述に於て、基督若くば基督敎に關して一語を着くるなし彼れは基督に關して、何の聞知する所あらざりき是れ(ブリタニカ)大英百科字書』記者の認むる所也。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『於是乎羅馬の大史家タシタスの基督存在を主張する者の爲めに、第一

の有力なる證人として曳出さる。彼れ果して如何の證明を供せる乎。

『タシタスの「史記」(Annals)を見るに、ネロ帝治世の條下に記して曰へるあり。帝は「其罪惡を以て嫌忌されたる、且つ普通に基督(クリスチヤン)教徒と呼ばれたる一流の人民を酷刑に處したり。此派の祖師はクリスタス(Christus)なる者にして、チベリオ在世の時、大守ポンテオ、ピラトの爲めに罪人として處刑されし者也。此有害なる迷信は斯くして一時鎮壓されしも、再び破裂て、其發源地たる猶太全土に蔓延せるのみならず、遂に首都(羅馬)にまで達したり。首都は害毒醜辱なる百物、各地より注流し來りて其隱れ場を得、幇助奬勵を受くるの處なれば也。左れば初めは此派に屬することを自白せる者のみ捕へられしも、彼等よりして更に大多數は發見されて、盡く罰せられしが、其は全市に放火せる者の外、人間を憎惡するの罪に因る者更に多かりき。而して其處刑は力めて彼等をして嘲弄汚辱を受けしめんとし、或者は野獸の皮に包まれて猛犬に嚙

み割かれ、或者は磔殺されたり。又は燃料を全身に塗り、夜間之に點火して燈臺に代へ焚殺さるゝ者もありき。ネロ帝は斯る場合には其庭園を觀場の用に供して、種々の趣向を公衆に觀覽せしめ、自己は時には馭者の裝ひを爲して群集に混り或は自ら馬車を驅りて見物したり。斯くて此等の人々は實際有罪にして、懲罰を値ひせる者なりしに拘らず遂には公安の爲めよりも寧ろ獰惡なる一人を滿足せしめんが爲めに虐殺されたる者として、世人の憐憫を受くるに至たり」と。

タシタスは紀元五十四年或は五十五年に生れて、百三十四年に死せりと傳ふ、寧ろ第二世紀に屬せるの人也。而して上揭の一節を以て眞正にタシタスの筆に成れりとせば、其は多分紀元百七年の頃に書かれし者也。而して極め輕侮の調子を以て、彼等基督教徒は曾て罪あつて刑されしクリスタスなる者の徒黨なりしと云ふ。是れ唯だ當時の基督徒自身の唱說せる所を、其儘に繰返せし聞書きたるに過ぎざるのみ。

豈に基督の存在を確認するの證左とするに足る者ならんや。況んや此一節が後人の僞作に出づるは、殆ど爭ふ可らざるのことなるをや』

ヨセフス（ヨセフス）に至りても幸德氏は亦從來言はれ來りし疑難を繰かへしたる而已、曰くヨセフスの歷史中に發見せらるゝ基督に關する記事は後人が挿入したるものにして、ヨセフス自身の筆に非ずと。誠に都合よき論法なる哉、自家に不利なる文書または記事をば悉く僞作と斷定して、抹殺の功を全うせんとす、抹殺論者全體の慣用手段として從來有名なる此の論法は是れ『耳を掩うて鈴を竊む』の流のみ、已一人聽かざればとて、天下萬人の耳を如何せんとするや。勿論眞に僞作なる物は僞作せざる可からず、眞に無き物は無しとせざる可からず、只淺薄なる論理を以て太陽を抹殺し去らんと試むるの愚舉なるを謂ふ也。

余輩の目を以て視きたれば、併しながら基督存在の證跡は殆んど山の如くにして、如何に抹殺に贊成せんとするも贊成し得ざるを奈んともする無

し。

但し今進んで大いに此の點を對論するに先だちて、茲に豫め余輩は比象類例（アナロジ）（Analogy）を擧げて以て互に相發明する所あらしめんと欲す。

按ずるに、其の當時に於て名聲の大に揚がらざるを理由として、其の人の技能や學識を甲乙藏否する如きは、動すれば正鵠を失するの甚だしき者あらんとす。知已を千歲の下に待てる者、東西古今其の人に乏しからずと知らずや。幾十歩時世に先だてる『預言者』（プロフェット）として英哲カーライルは、其の著書俗間に歡迎せられずして、一世の文豪も屢ば『嗚呼我れ餓死せんとす』と叫べり。之に反して衆と共に物質文明を謳歌し、水晶宮裏の世界博覽會に目くみて、嗚呼黃金世界今や此に實現すと稱へたりしマコーレーは、忽ちに其の名聲嘖々たる者となりて、一躍華族となり、實に所謂『無名の人として寂ね、有名の人として醒めたりし』也。然るに今日は如何、其の發售萬を以て算へられたりしマコー・レーの著書は、僅に十を以て算へられたりしカーラ

イルの著書と全く其の地を替へ、後者は徧くインスピレーションの語として天下に歡迎せられつゝあり、洛陽の紙價爲めに大に貴からんとす、カーライルをして之を生前に見せしめたらば、如何に滿足なりしならんか。カーライル研究會は今や處々に起り、ブラウニング研究會と相ならびて、之が人生觀を社會に皷吹し、此の輕俳浮薄なる世に英雄崇拜の醇風敦俗を挽回せんとす、

稍溯りてミルトンを顧みるに、如何。其の狀更に是よりも惡しき者あるが如し。思想の高遠と聲調の諧妙を以て古今獨歩と稱するミルトン (Milton) の失樂園 Paradise Losto は今日に在りてや國文學の英粹として、文官の試驗にまでも出る程なるが、其の初て出版せられたる時は、實に惘然なる有樣にして、僅に二三百冊を賣りたりし而已。而して其の偶夫買はれたる者も多くは長く高閣に束ねられて、徒らに蠹魚の腹を肥せしならん。當時俗間に評判よかりしドライデン (Dryden) すらも、群民の聲に雷同してや、或る時ミル

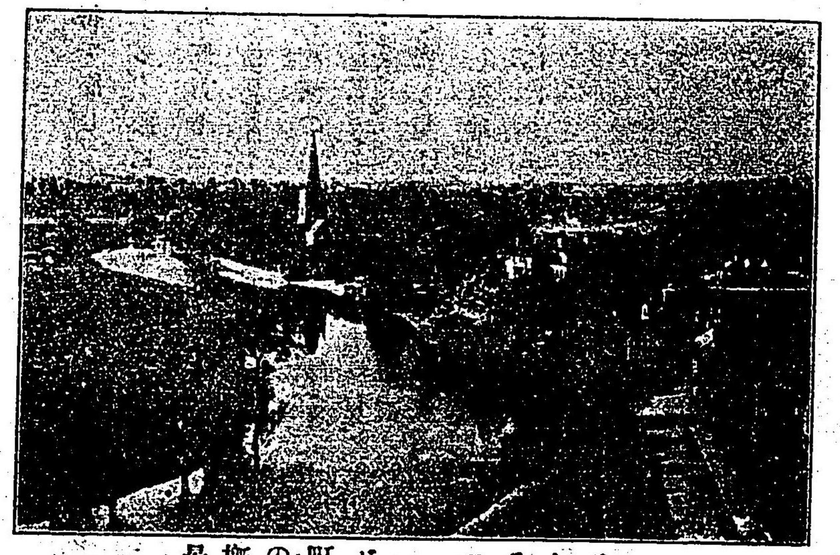
トンに求むるに己をして其の失樂園を通俗的に改作せしめんことを以てしたるが、勿論之を改作するは之を泥化する者なれば、ドライデンは虎を畫かんとして猫を畫くに終りし而已。

然らばシエークスピーアルは果して如何なりしぞや。當時彼が事を書ける文書斷簡零墨といへども殆ゝど全く存在せず、然り、天下の最大詩人前に此無く後に倫なき詩聖シエークスピーアルは、殆んど一百年間默殺せられてありき!! 故を以て彼は今まで屢ば抹殺されんとしたり。抹殺論の最も有名なるは倍沙同一論にして、ビーコンとシエークスピーアルとは同一人なりと主張し後者は只前者が匿名として用ひたる者のみと推斷す。此の臆說の理由を按ずるに、云ふ、シエークスピーアルはエリザベス朝の文學界に於ける最第一の巨人にして、又實に天下空前絕後の文豪なりしが、果して斯の如き大天才の當時演藝壇に靈腕を揮ひぬたらんには、かの奎運隆盛なる時代に於て、何とか彼が如く群明星間に獨り然か蔑然と看過せられた

ら、ん。然るに其の爾く看過せられ了りたるは、即ち實際シエークスピーアルといふ人の存在せざりし證據と謂はざる可からず。若し又當時何人がシエークスピーアルといふ名を冒してハムレット、マクベス等の大戲曲を書き得たりしやと問ふならばベーコンを措きて他に之に當り得べき者あること無し。シークスピーアルとは(Shake)(揮ふ)(Spear)(矛)をにして、揮矛氏とは即ち其の腕の非凡なりしを形容せる者のみ、眞に此の名の人ありしには非ず而してベーコンがシエークスピーアルなりしとの事は單に此に止まらず、更に又若干の戲曲中に『我は、ベーコン』なりとの意味を指示すべき暗號の含まれたる者あるを發見す(?)否單に內部の證據のみを査べんも、ベーコンの論說とシエークスピーアルの戲曲とは、其の間に互に相酷似する觀念及び文字鮮なからず、以て兩者の同一人なるを證すべし。云々。之をBacon(ベーコン)(the ery)と稱す。

但し此の倍根臆說は其の唱へらるゝ頗る久しと雖も、未だ勝を制するを

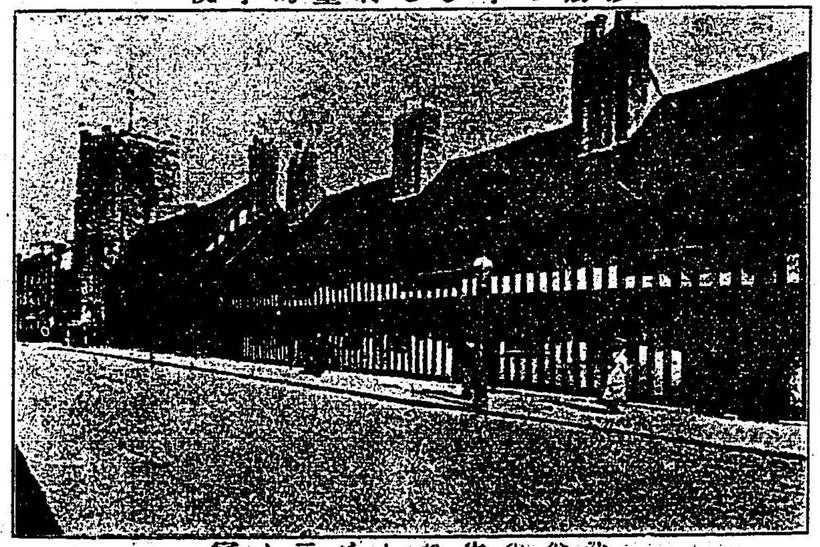
得ず、而して其の勝を制し得ざるは、シエークスピーアル存在の痕蹟いよいよ多く顯はれ來りつゝあれば也。シエークスピーアルは一千五百六十五年四月廿三日を以てウヲウヰク郡なるストラフォールド、オン、エーヴォン(Stafford-on——Avon)に生る。ストフォールドは其の名の示す如くエーヴォール河の右岸に立てる村(今は町)にして、其處に古くより一大敎會室あり(第一圖中に尖塔の變えたる者即ち是なり)、其の中にシエークスピーアルの洗禮を受けたる聖水盤と稱する者も見え、又古記錄(過去帳等には)シエークスピーアルの洗禮及び埋葬を記し墓地にはシエークスピーアルの墳墓さへあり、又カンタルベリの法廷內にはシエークスピーアルの遺書といふ者を藏す、頗る奇なり。



ストラフォード町の概景

中央に尖塔雲に聳えて位するは該町の尤も古き教會堂にして、右端に見ゆるは南通(サザルン、レーン)と稱する處なり、シエークスピアルの生れしと云ふ家は今尚保存せられて、訪客は二十錢を徴せられ其の一年の收入五六萬圓に達すとぞ但シ氏が晩年に倫敦より退ぎ住める家屋ニウ、プレース(新邸)は既に朽壞し去り、今は只其の邸址を存する而已

沙翁の學び し村塾的學校



沙翁の生れしと云ふ家

シエークスピーアル崇拜熱の盛んなるや、一千八百七十七年宏壯なる記念劇場はストラフォールド、オン、エーヴォンに建てられ、今や毎歳一回四五月の交を以て二三週に渉りてシエークスピーアル祭を茲に執行す。既に斯の如くなる而已ならず、シエークスピーアルが特に親しかりしベン、ジョンソン Ben jonson は『シエークスピーアル追悼の詩』といふを賦してあり、是れこそ同時代の人がシエークスピーアルと特に指して書きたる唯一の『文獻』なるらめ。次勿論幸徳流の抹殺的筆法を以てせば、此の如き一孤簡はシエークスピーアル聚負なる後人の僞作に係る者と斷定すること易々たるべけん。傳に云ふ、シエークスピーアルは一千六百十六年四月、時の文豪ベンジョンソンとドレートンを吾が新邸にて盛んに饗應し、之が爲に病を得て遂に其の誕生月（四月二十三日）に歿したりと。兎に角ベンジョンソンは特にシエーヘスピーアルを追悼すべき理由を有せしと見ゆ、然れば群文豪中只一人此の大天才の死を弔へり、而して其の辭も亦稱讃を極めをれり、

"Soul of the age!
The applause! delight! delight! the wonder of our stage!
My Shakespeare rise! I will not lodge thee by
Chaucer, or Spenser, or bid Beaumunt lie
A little further, to make thee a room."

斯く口を極め筆を盡して『一世の神髄』と云ひ『我が劇界の奇蹟』と云へるは、則ちベンジョンソンが竊にシエークスピーアルに敬服する所あるに非れば、書けざりしならん、單に死者を譽る一片の世辭のみにも非じ與。但し從來世人は之を表裏に解釋して、ジョンソンはシエークスピーアルよりも已を上なる者と自ら認めをれりと云ひたるが、如何にも學問の上に於ては確に然か信せしなるべし。因てジョンソンは又同詩中にシエークスピーアルを評して、Small Latin anud less Greek（少許の拉甸語及び一層少許の希臘語）を知ると書けり、是即ち拉甸語の知識は少にして、希臘語の知識は尙是より

も少なりとの義なれば也。勿論、上に掲げたる、ストラットフォールド村の學校の如き處に於ては、希臘語や拉甸語の蘊奥を究むる能はじ、又實にシエークスピーアルに於ては――固より佐々木照山先生や木村鷹太郎の如く博言原語の學を本領とするにあらざれば――之を究むるを要せざりき。然れども大天才の大天才たるは、言語文字に依らずして、所謂不立文字的に、百事百物を直覺直識するに在りとす。是れ學校に於て間接に學ぶならず、實際に就いて直接に學ぶ者にして、而して、實は又是れ最も深く覈べ究むる者なり。然るを俗人は渠が學校教育を受くるの少なきを見るや、彼背て學ばず、果して何をか能く知らんと貶評す、何等の淺薄ぞ！大天才は――上古の聖人につきて言はれたりし如く――天地に俯仰觀察して、事物の眞相を直識するが故に、學ばずして却つて善く學び、習はずして却つて善く習ふ。上古は之をホーアル(Homo)に看、近古は之をシエークスピーアルに看たり。今の抹殺論がシエークスピーアルに於て怪訝する所は、昔の賢哲プラトーン之をホーマルに於て頌讃せり、プラトーンは當時のホーマル吟誦家輩が自らホーマルに精通すと稱するを咎めて、言ふらく、ホーマルは大聖、至聖物として通せざる無く、事として辨へざる無し。一篇のイリアドは是れ純然百科全書的に知識の寶藏なり。例へば誰がホーマルに競走や競馬の秘訣を教へしや、誰がホーマルに伯樂の術を授けしや、誰がホーマルに馬車の製造を傳へしや。然るにホーマル一だび筆を援て、馬車走競を描寫するや、馬匹の精選、馬車の製作、馭驅の手練、悉く寫し來りて精微を極め、巧妙を盡くす、諸餘の事項凡て皆かくの如し。萬能に通じたる者にあらざれば、一人にして能く、ホーマルを十分に領會するを得ず、ホーマルは實に天地と其の博大を同じうすれば也。

今シエークスピーアルについて之を見るに、嗚呼奇なる哉全く之と其の趣を同じうす。大天才は東西古今符節を合す、亦奇絶妙絶なる哉。シエークスピーアルに就いて政治家は致治の秘訣を學び得べく、經濟家は經濟の

秘訣を學び得べく、乃至法律家は法律の神髄を學び得べく、哲學者は哲學の玄妙を學び得べし。然れば、フロシンガムの如き人々は說を爲して曰く、シエークスピーアルは萬能に非ず、如何にして斯く千差萬別の人事に悉く精通しをるを得たるや、判事ホームム(Judge Holmes)がハムレット、マクベス等の戲曲はシエークスピアルの著作に非ずと主張せる理由は全く玆に在りとす。又實際シエークスピーアルはコルーッヂやアーノルドの極に讃歎する如く圓滿雄大なる人物にては非ざりしなるべし。若し果して、斯かる圓滿雄渾なる偉丈夫にて有りしならば、當時の具眼者豈之を看過し去るが知き事あらんや。是れ併しながら、眼光紙背に透らざるの凝團のみ。

抑も棺を蓋うて而して事定まるとは、人生の常にして、存命中は人々互に相疑ひ又は相嫉み、人物の甲乙藏否容易に決すべからざれば、生前に於て互に相推し相薦むる如きは、寧ろ世に稀なる者とす。例へばベーコンの著述中にシエークスピーアルの功德を認むる文字なきと同時に、シエークスピーア

ルの著作裏にも亦ベーコンの偉能を稱ふる言辭あること無し。知すず識らずして互に相默殺するに至りぬ。然れば當時の(即ち其時代の)書籍に其の名が見えねばとて決して其の人が存在せざりしとの證左には非ず。之に反して當時の書籍及び新聞雜誌に其の名の非常に喧すしかりしナポレオンすらも、之を抹殺せんとすれば、容易く抹殺され得べしとて、既にナポレオン抹殺論を泰西に草せし好事家さへあり、近くは我が『新日本』紙上に之を我が國へ紹介せるあり。否、實は抹殺し得ずと雖も、詭辯以て自ら抹殺し得たりと妄信する而已、抹殺の事豈容易ならんや。メルキセデクの如き、兒島高德の如き、只一回歷史上に現はれたる者の如きは、或は抹殺し得んもアレキサンデル大王の如き、シーザル帝の如き、又は成吉士汗の如き、帖迷兒藍の如きは、其の功業赫奕として後昆に乘るが故に、到底抹殺すべからず。シエークスピーアルも亦斯のごとし。其の絕論逸群なる雄篇巨作は巍然として人窓に屹立す、到底其の成業をば抹殺すべからず、赫灼として日月と火を爭ひ、人

間の爲に萬丈の光餘をあげつゝあればも也

是に於てかシエークスピーアルをば抹殺せずして、之を貶黜せんとする人々相續いで起れり。或人曰く、シエークスピーアルは當時某姓の書き貽したる書翰に依れば、悖德汚行の人物にして、且殺人罪を犯せし者なりと、或は曰く、彼は品性劣等なる者にして酒色に沈湎し、衆人の爪彈きする所となれりと、出所の如何はしき斷簡零墨を妄信じて、シエークスピーアルを中傷せんと試みつゝあり。然し乍ら若し當時の文豪ベン、ジョンソン(即ち沙翁が餘りに馳走し過ぎて爲めに自ら病を得て歿したりと云ふ莫逆の親友)がシエークスピーアルを弔らへる詩にして果して僞作ならずとせば(斷じて僞作にはあらじ)同ジョンソンが亦ベーコンの六十歳を祝する賀筵に陪して獻じたる壽詩と拘しく、其各自被詠者(サブジエクト)の人格及び學識を證明するに於て最大屈强の材料なれば也。即ち英國の此の大法官を其六十の賀に頌へて、

England's high Chancellor, the destined heir,

In his soft cradle, to his father's chair
Whose even thread the Fates spin round and full
Out of their choicest and their whitest wool.

と歌ひたりしベン、ジョンソン若し同一の筆を以て又シエークスピーアルを讃歎して "The was not of an age, but for all time" (彼は一世一代の詩人にあらず寶に萬世不朽の尤物にこそ)とシエークスピーアルを讃歎せしならば、前者の眞實にして信ずべき如く、後者も亦拘しく眞實にして信ずべき者には非じか。縱し『ハムレット』てふ戲典は他にも先づ存在したるにもせよ(マルク國の王子の事蹟に基づけば他にも亦已に之を題に取りて書き綴りし者あらんは却つて近眞ならずや)シエークスピーアルの『ハムレット』は、群小ハムレット中の最も雄大深遂なる大ハムレットたることは、百喙萬喙も之を言ひ消すこと能はず、恰も群ファウスト(Faust)中にありてゲーテのファウスト獨り鷄群の孤鶴の如く挺然と卓越するが如し。マクベス然り、ヘンリ然り、他も亦皆然り。此の靈腕を以て劇界に殺到し、舊來の雜然た

る衆戯曲を刷新し、新生面を舞臺に開かしめながら、自家は却つて毫も其功に居らず、否な其存立をさへも却つて忘れられたらん如き觀あるは、畢竟是れ自然の詩人 (Poet of nature) たる所以にして、正にブーノルドが沙翁に向いて歎せるが如き歟、——

And thou, who dipst the stars and sunbeams Know,
Self-schooled, self-scanned, self-honored, self-secure,
Didst tread on earth unguessed at.——Better so!

然るに、批評家輩の慳吝なる、ベーコン臆說の立たぬを見るや、今度は幾多の失敗の後、最後にラトランド伯を持出すに至りぬ。此說を主張せるは、獨人カール、ヴライブトロー博士にして我が二六新聞紙上夙に之を紹介したるあり、頗る要領を得たれば、之を借りて該臆說の一班を窺はんに、云ふ——

(前略)『此の頃また更に異說を唱ふる者起れり、歐米の文壇に於て大に注目せられつゝあり。即ち從來シェクスピーアの名に依りて傳へ

られたる多くの脚本は、沙翁以外の人物の著作に係るを主張せる學者あり、獨逸人にて博士カール、ヴライブトロー氏是なり。博士が主張する所は從來の沙翁劇に所謂沙翁の作にあらずして、エリサベス朝に於て文藝の熱心なる保護者たりしラトランド城主ローデアー伯の著作する所なりと云ふにあり。

從來多數の沙翁學者は、彼の多くの劇をストラトフォード、オン、エヴオンなるウイリアム、シェクスピーアが作たる事は殆ど疑ふべからざる事實となしたりき。茲に此の論を進むるに當りて、沙翁の行狀と傳ふる者を一瞥するに甚だ怪訝に堪へざるあり、云々、(中略)沙翁が生涯は傳ふる所に依れば、極めて其の性放恣にして、一週の中三晩若しくは四晩は其の自宅に歸ることなく、其の劇場の事務に繫はらぬ時間は悉くマーメードと稱する酒樓若くは他の下等なる料理店に遊び暮したりと云ふ。因に此の種の酒樓若くは下等料理店は、ロンドン市の各所に

多く散在し、淫靡極まりなく、當時下等社會の人殺し喧嘩等の根原なりしと云ふ。

彼が日常既に斯くの如く、周圍の狀態亦斯くの如くして而かもなほ彼の大作著述に從事する餘力否能力ありとすべきか、是れ大なる疑問に屬す。世に所謂沙翁劇と稱する四十餘種の作物就いて其の人世觀に見よ。其の深遠なる思想に見よ、其の端睨すべからざる相像力に見よ、其の流麗なる詞藻に見よ、其の文學的價値に就いて詳密に點檢せよ。此の品性下劣にして放縱極まりなき一賤夫の能く企て及ぶべき所なるか。進んでなほ其の深き觀察力と、人類に就いての廣き智識と、社會の上流と中流との事情に精通せる所、若くは宮中生活に明るき點、其の他歴史、法律、美術、科學、古典、地理、哲學、文學等、凡ての學に博き所、其の著者が到底所謂沙翁の如き人物の能くする所に非ずして、此の時代の最も傑出したる學者にして實驗家たらざるべからざるを證して餘あるに

非らずや。

されば是れを如何なる方面よりも見るも、彼の所謂沙翁劇の作者はエリザベス正朝に於ける他の何人かの手に依りて著作せられたる事はまた多言を要せざるべし。故に或は當時の大哲學者フランシス、ベーコンを以て是れに擬したるものあり、即ち米國の議員イグナチウス、ドネリー氏に依りて主張せられたる說にして、一時世人を驚かしたるも全く無稽の說に過ぎざりき。なほ此の他にも是れに類似せる說ありて熱心なる沙翁崇拜者を失望せしめし事其の幾何なりしかを知らず。されど其の根抵極めて薄弱にして以て明白なる證跡を擧ぐるに由なかりしが、此ラトランド伯說は最も傾聽するに價あるものと信ず。

即ち前にも述べたるが如く、ラトランド伯說は、現代獨逸に於て文學上の批評及び歴史家として有名なる博士カール、ブライブトロー氏が主張せる所にして、獨逸が從來沙翁學者を多く出したる事は人の知る

所なるが氏は極めて沙翁研究に熱心にして其の著書も亦極めて多し。其の著書中英國文學史「マーストンの野に於けるクロムウエル」「バイロンの秘密」等は最も著しきものなり。

ラトランド伯ローヂアー、マナーは一千五百七十六年十月六日に生れ、當時武士の模範たりしフイリップ、シドネー卿の養子となる。此のマナー家に就いては諸種の傳說あるが、此のラトランド伯は彼の有名なるハトンホールのドロセー、ツアーノンと結婚して、ヴアーノン家後繼者となりしと云ふ說信に近し。なほ一事最も興味あるは、此のラトランド伯の子孫は、現今英國エールに居住しつゝある事にて、彼の米國までも、美人の聞え高きマジョリー、マナース嬢の父君現ラトランド公即ち是なり。公は英國に於て最も風光の美に富める地と謂はるゝベルヴオア城及びハドン、ホールの所有主たり。而してブライフトロー博士は、是等の城中に現に所藏せらるゝ文書中には、所謂沙翁劇の作著

はラトランド伯たる事を證する十分なる證據ありと爲せり。

博士は先づ劇中に現はれたる各種の人物、事件等を詳細に考察して佛蘭西、伊太利、丁抹の事情に鑑みたり。沙翁が壹夜マーメード料理店に出入して、足一度も英國外の地を踏みたることなきは、動かすべからざる事實なり。而も一度其の作物に就いて見るに各國の事情に通ずるの極めて該博なるに驚かずんばあらず。之に反して、ラトランド伯は、人の知る如く、大旅行家にして一千五百九十六年歐洲各國を歷遊し佛蘭西、伊太利等の其の最も愛せし所、なほヴエロナ、ヴエニス、マンチユア、ローマ、ミラン、パヂユア等に長日月を費したり。彼の「ヴエロナの二紳士」「ロメオ、エンド、ヂユリエット」「ヴエニスの商人」及び他の伊太利を舞臺に取りし作中に見ゆる各地方の知識は、此の間に得來りたるものなるべし。

劇中英國及び諸外國の法律上の原理若くは熟語に就きて極めて明

確なる知識を示したるが沙翁が曾て此等專門の事柄を研究したりと云ふ事を聞かず。ラトランド伯はパヂユアの大學に於て法學を研究し、歸國後なほロンドンのクレー法學院の學生となり、斯學を專攻し、今尙此處に其の姓名は彫刻せられつゝあり。「テンペスト」中に作者は熱帶地方の光景及び氣候上の事態に就き博き經驗を有する事を示したるが、料理屋に白粉臭き婦人を相手として晝夜遊び暮したる沙翁は果して何れの處より其の知識を得來りたるか。ラトランド伯は曾てエセックス伯と共にアゾーアに遠征を試みたる幾度も難船し種々の經驗を得たる事あり。是れやがて「テンペスト」中に顯はれたるものにあらずや。沙翁劇中には屢々丁抹の風景及び家庭等出づる事あり、而も是等は英國の其れと全然異なる所あり。ラトランド伯はシドネー卿に從つてホルランドに於て西班牙人と戰ひし事ありたり。

元來沙翁劇は一千六百一年より一千六百三年までは一冊も世に現

はれたるもの無し。ラトランド伯は此の三年間獄中の人たりしが爲にして一千六百三年伯はジエームス第一世の名代として丁抹皇太子の洗禮式に參列する爲め丁抹に赴きたり。此の時伯は「ハムレット」中に顯はれし、丁抹の風俗、習慣に就いて多大の知識を得、爲めにエルシノーア城中王家に對する詳細なる描寫を能くし得たりしなり。劇場の支配人たりし沙翁が丁抹に赴きたるは未だ聞かざる所にして、若し赴きたりとするも、王宮の客たるを得ざりしは明かなり。

史學研究の極めて幼稚なる時代に而も英國人にして古代丁抹史の驚くべき知識を獲んこと極めて困難の事業たるは言ふを要せず、唯丁抹人にして最も優れたるものゝみ能く得べきなり。ラトランド伯はエルシノーアに在留中。親しくギルデンスターン男爵及びローゼンクランツ男に面語したりと云ふ。此の二人物は「ハムレット」中に見えたるものにして、なほパヂユア在學中ローゼンクランツ男の子と親友

たりき。

沙翁劇の中最後に世に出でたるものは「コリオラナス」と「テンペスト」となるが、是れ千六百十二年にして、此の年六月廿六日恰もラトランド伯卒去せり。而して今後劇の世に出でたるものなく、沙翁が死は、一千六百十六年なり。博士は是れを以て有力なる證據と爲せり。

博士はまたラトランド伯が自ら殊更に其の著作に署名せざりし理由を述ぶる甚だ詳なり。蓋し當時は演劇を賤しむの習慣著しく、中流以上の人々は劇場に出づるを甚しき恥辱と爲したるが爲め、況んや貴族にして若し劇などの作に從事せば、世人より誹謗せらるゝ事一方ならず、且つ沙翁劇中には多くの歴史上の事件錯綜して、然も皆彼の時代の王家に關聯せざるは無きにより、伯の如き位置の人にして、是等の作者たるを知らるゝときは、忽ち女皇の咎むる所となり、又宮中に多くの敵を作るに至るべし。更にまた此の時代は裁判上些細なる罪人と雖

も、直に捕はれてロンドン塔下の獄舍に繫がれたる者日に其の幾人なりしかを知らず。彼の大僧正ヲルセーは、エリサベス女皇の父君ヘンリ第八世の爲めに獄に投せられたる時『若し余にして神に仰へたる半の力を以て王に奉仕せば、恐らくは此の苦を受けざりしならん』と嘆じたるにあらずや。以て此の時代を推するに足るべし。斯くの如き事實に徴して、ラトランド伯が其の眞の名を秘したる理由を知り得べし。而して伯は其の已が著したる作に對して、劇界に最も便利を有したる支配人ウイリアム、シエクスピーアの名を借りて之を公にしたりしなり。』

吁嗟臆見妄計も亦甚しい哉、是れ要するに、皆非英雄崇拜的なる慳妄我慢の精神より涌き出る者とす。然し乍らシエークスピーアルといふ人には此天下古今獨歩の大詩人たる名譽を獻ぐるを吝めども、四十余篇の巨作屹然として世に在する以上は、何人にか正に同一なる名譽を歸せざるを得ざ

るべし、ラトランド伯果して其作者と見做されたらば、此の名譽を獻ぐるに世人は躊躇せざるべきか、恐らくは二の足を踐みて、更に他の候補者を捜し出し來るならん、嗚何等の怪事ぞ！

第四章（問題承前）

基督果して當時に知られざりしや

猶太歴史家（ヨセフス（ジョセフアス））

余輩はシエークスピアルと基督（キリスト）とを相對照して前章に云々する所ありたりしが、既に暗示せし如く、シエークスピアルとても全く其の當時に見證者（ウイトネス）無かりしには非ず當時全英國中第一の文豪と人も許し又自らも許せる詩人ベン、ジョンソンが渠（かれ）を讃誉して「萬世の詩人」"Poet for all time" と稱せしは、決して是れ輕看過すべき無意味の句に非ず。ベン、ジョンソン B. en Jonson は自ら當時に冠たる者と信じたれば、決してシエークスピアルを嫉まず、長は長とし、短は短とし、寧ろ直言して諱まざりき。即ち彼は、ミルトンより博學多識なる（learned）戯曲家と評せられたる位なれば、己を以て沙

翁に比してや、必ず沙翁が語學の知識の淺小なるを感せしなるべく、遂に此の所感を吐露して、前章に引證せし有名の一句、"Small Latin and lesser Greek" を綴り成しぬ。而して此の直言の無妄眞誠なりしことも亦間接に證明せられたり、即ちシエークスピーアルの書齋に於ける藏書にして往々あちこちより書籍市場へ持ち出さるゝ者あり、皆沙翁眞筆の姓名を載せ、一冊數萬金に賣買せらる、而るに其等の書籍中には希臘羅馬の古典舊籍にして原語なる者幾ど希なりと云ふにあらずや。是其の "small (little) Latin and lesser Greek" なる一明驗と稱すべき也。

斯の如く基督に於ても亦決して當時に全く知られざりしには非ず、却つて其の偏く世に知られたる證據四方八面に存在するを奈何せんや。余輩は一理論臆說を先づ立て、而して歷史上の事蹟を隨意に揑造し、或は勝手に抹殺することを好む者に非ず、善きにまれ、惡きにまれ、事實は事實とせんことを余輩は欲す。虛實及び勝敗は一に事實に依りて決せざる可からず。

按ずるに、基督の存在を證する「文獻」としては、古來三重の記錄あり、即ち其の一は現存の歷史上に炳然として隨時閲讀すべき者、其の二は嘗て古記舊錄上より故意に刪除せられ、或は抹殺せられたりし者、其の三は長く地下に沿藏せし者、是なり。羅馬の太史公タシタス(Tacitus)が其の簡潔にして要を得たる歷史(所謂アナルス(Annals))の中に基督教徒につきて載せたる一段の記事は、本來羅馬の桀紂ネロ帝の暴虐無道を春秋的筆法に直筆する傍ら、自然と基督及び基督教徒に說き及ばしたる者なれど、當時教徒が如何に羅馬人等に畏怖られ、讒誣され、憎惡まれ、迫害られしかを示すに於て眞に左氏の妙筆と稱せざる可からず(其の一譯文は幸德氏の前章に掲げたり)。然るに例の抹殺論者輩は、此の一文の存在に一方ならず困却して、遂に之を都合上抹殺せんと決し、一齊に獨斷主張して曰く、是れ後世の基督教徒が揑造して挿入したる者なりと。而して其の證據を問へば、唯言ふ最初二三世紀の基督教徒にして此の文を引用したる者なければ也と(!)

嗟吁何たる非常識ぞや。最初二三世紀は勿論四五六世紀に至るまでも基督の存在を疑ひし者は、幾ど稀なりしかば、基督教徒は該の文章を引いて以て基督の實在を證明することは全く無用の事なりしにあらずや。而して又該記事たるや、勿論基督教を忌み嫌へる羅馬人の筆なるが故に、基督教を讒誣こそすれ、基督教の眞理をなどて顯彰にすることを務めんや。然り、是れ既に――迫害の事實を外にしては――讒誣の語なり、最初の護教論者等、狂人に非らざる限りは何ぞタシタスの該文辭を引證することを肯てせんや。恰かも佛門の護教論者が韓退之の佛骨表を引いて能仁氏の覺道を證明せんと試みざると一般のみ。是れ最も見易き道理なれども、論者は、抹殺に熱して眼くらみをれば、此の一目瞭然たる論理を看明らむる能はず、徒らに癡人の夢を喋々して自ら賢ぶりつゝあり、實に其の愚や及び易からざる也。

既に斯の如くなれば、タシタスの該記事を以て後人の竄入と論斷する如きは、盲蛇の妄動にして、其の大膽鐵面皮なるは蓋し譬ふるに物なからんと

す。然るに此の外にも尚若干の證文(authorities)あるが故に、論者は未だ之だけにては枕を高うして眠る能はず、是に於てか「毒を食はゝ皿までも」との了簡にて、論者輩は「煎鍋より炭火の中に飛こみ」毒筆一揮、抹殺を縱まにし、悉皆を僞作視し揑造視し去らんとす。是れ一見アレキサンデル大王が快刀一揮フリギヤ王ゴールヂースの結絲(Gordian knot)を切解せし英斷に似て實は大に非なる者とす。全く是れ玉石を混同し、薰蕕を併燬する輕舉妄動のみ否、故意の盲動と謂はざる可からず。

基督の降誕をさること約四十年にして生れし猶太國の大歷史家ヨセフス(ジョセファス)は、時の羅馬皇帝に愛顧せられて王宮に出入し、親羅主義者として自國人の間には寧ろ不人望なりしが、彼其の該博なる內外の知識と富贍なる文才と犀利なる判斷力とを以て「猶太古今史」及び「猶太戰爭記」なる者を著はし、其の記叙は悉く謹嚴なる希臘文を以て之を行り往々史眼の烱烱たして炬の如き者ありたれば、其の狀司馬遷の「大史記」に彷彿たり、羅馬東

方經略史に於てや實に天下唯一の寶典として屹立し、羅馬の群歴史家をして顔色を失はしめ、實際彼等をして筆を東征の記事に絶たしめたり、斯人――即ちヨセフス――は其の『猶太古今史』中に於て、ヘロデ王等の施政或は舉措を叙するに當りて、基督の事に論及し、説を爲して曰く、――

『當時イエス、キリストと稱する者あり。彼は哲人(若し彼を「人」と呼ぶことにして宜しきに適はんには)なりき。――彼は多く奇蹟を行ひたり、凡そ眞理に與する人々には百世の師表たり、猶太人及び異邦人夥く之に從へり。彼は基督(Christ)救世主)なりき。我が邦人中の重だてる人々頻りに攻め訴へしかば、總督ピラト彼を十字架に釘けしかど、最初より彼に愛し從へる徒は依然彼を棄てざりき。如何と

なれば、彼れ三日めに再び甦へりて彼等に現はれたればなり。斯の事、および其の他無數の奇蹟は、靈眼を有する幾多の預言者が夙に彼につきて豫言したる所に係る者とす。彼の名に因みてキリスチアン(Christians)と稱せらるゝ一種族(宗徒)は今も猶現存して消滅せず、』

此の句は簡短なりと雖も、基督および基督教徒につきてヨセフスが聞知せる所を極めてラコニク的に、極めて簡潔に、説き出し、最も要領を得て、毫も間然すべき點あるを見ず、ヨセフスの謹嚴なる筆法陸離として、具眼者を一見に首肯せしむべし。然るに反對論者は、此等の文字を以て己等に致命傷を與ふる者と爲し、流石にヨセフス全部をば抹殺し得ざるが故に、此一文を後人の僞作として抹殺せんと百方工夫し、遂に何等の價値も無き理窟をならべて、世間の聾瞽者流を瞞着せんと務む。此の徒輩に誘惑せられたる我が幸

徳氏も、遺憾ながら彼等の糟粕を嘗めて、生かぢりながら左の詭辯を弄せら
る、——

「馬太傳第十五章に、基督は『イスラエルの家の迷へる羊の外に我は遣
はされず』と云へり、此事信ずべくんば、基督は異邦人を招徠することは
之れ無かりし筈也、而して猶太人は古來其豫言者が奇術を行ふを聞睹
するに熟す、基督の奇蹟を以て直ちに人間以上と言はんとするが如き
は、ジョセフスに存て、有るまじきのことに非ずや、加之ジョセフス果し
て耶蘇が救主基督なることを信せん歟、彼此不可思議なる權化に關して
周到なる注意研究を爲すべきの理也、而も冷然として曰ふ「此種族は今
日に至るも猶ほ消滅せず」と何ぞ其文字の支離滅裂なるや、是れ豈に何
等の穿鑿考證を勞せずして、此記事夫自身にして直ちに其僞物たるを
表白する者に非ずや、而して初めて此一節を引用せるは、基督教古文書
を勝手に僞作せるに有名なるイウセビアスにして、此前に於ては曾て

此文字を記せる者なし云々」

嗚呼何たる滑稽ぞや、其の論理の支離滅裂なる、恐らくは他に比類なかち
ん歟、先づ論者は基督が『イスラエルの家の迷へる羊の外へは、我遣はされず』
と言へる由を喋々すれども、是は全く、一を知つて未だ其の二を知らざるの
妄評のみ、如何にも馬太福音書第十五章には、

『イエス此(ゲネサレ)を去てツロとシドンの地に往けるに 二二 其地に住
るカナンの婦いでゝ呼はり曰けるは主よダビデの裔よ我を憫み給へ
我むすめ惡鬼に憑れて甚く苦めり 二三 イエス一言も彼に答ざりしかば
其弟子きたり請て曰けるは我傍の後より呼はるが故に彼を去せ給へ
二四 答て曰けるはイスラエルの家の迷へる羊の外に我は遣されず 二五
婦きたり拜して曰けるは主よ我を助たまへ 二六 答けるは兒女のパンを
取て犬に投與ふるは宜からず 二七 婦いひけるは主よ然りされども犬
もその主人の膳より落る屑を食ふなり 二八 遂にイエス答へて曰けるは

婦よ爾の信仰は大也願の如く爾に成べし此時より其女いえたり」と記載されたど是は『人を見て法を說き』たるものにして、元來カナン人はイスラエル人民を常に攻め惱ませし宿敵たれば、イエス之が妄りに苦しい時に神頼みするを容さず、先彼女には其精神を眞摯ならしむべく、己には輕舉の譏を避くべく、特に斯く振舞ひ、以て物事に本末あるを暗示したる也、蓋し遠きに往く者は必ず近きよりし、『慈善は家庭より始まる』が如く、基督は先づ身を以て自國の人民間に救世の種子を播き、以て天下に其の苗を遍く頒たんことを計りたるなれば、外國傳道は保羅を待つて始めて成るべき自然の約束を有せり、是れ物事に本末ありとは謂ふ也。

之を要するに、基督は、何人にまれ、精神だに、眞摯にして、熱誠もて來り求めなば、之を救ふを躊躇せざりし者とす、豈唯隣邦のカナン人のみならんや、其の征服者たる羅馬人といへども、尙一視同仁之を拯ふを辭せざりき、請ふ左の實例に徵せよ、同馬太福音書第八章に記して曰く、

『五 イエスカペナウンに入りしとき百夫長きたり願ふて曰けるは六 主よ我僕癱瘓をやみ家に臥ゐて甚だ惱めり七 イエス曰けるは我ゆきて之を醫すべし八 百夫長こたへけるは主よ我なんぢを我が屋下に入奉るは恐れ多し唯一言を出し給はゝ我僕は愈ん九 蓋われ人の權威の下にある者なるに我下に亦兵卒ありて此に往けと曰ばゆき彼に來れと曰ば來る我僕に此を爲せと曰ば則ち爲すが故なり十 イエスこれを聞て奇み從へる人々に曰けるは我まことに爾曹に告んイスラエルの中にだに未だ斯る篤き信に遇ざる也十一 われ爾曹に告ん多の人々東より西より來りてアブラハム、イサク、ヤコブと偕に天國に坐し十二 國の諸子は外の幽暗に逐出され其處にて哀哭切齒すること有ん十三 イエス百夫長に往なんぢが信仰の如く爾に成べしと曰たまへる其時に僕は愈たり』

否、單に是に止まらず、基督はまた其の宗敎が他日天下萬民を遍く救ふべきものなるを偶然にサマリアの一婦人に告げし事あり。抑もサマリア(Sam-

nia)は元はイスラエル民族十二支派の中なる十支派(所謂ten tribes)が棲息せし處なれども、バビロンの王ネブカデネザルが其の住民を擄へて天下諸國へ散らして以來、イスラエル民族ならざる異邦人多く代りて棲みたれば、復曩日の敬虔なく、剩さへ猶太人(ヨセフとヘネヤミン二支派の子孫たる者よ成りれる)を嫌ひ憎み、交通すらも悅ばざる如き狀態なりしが、基督は通行の途上其の一婦人に救世の福音を聽かせたまへり。約翰傳福音第四章に記して云く、——

「イエスユダヤを去て復ガリラヤに往くに四サマリアを經ずして行こと能はず五遂にサマリアのスカルと云る邑に至れり此邑はヤコブが其の子ヨセフに予し地に近し六此にヤコブの井ありイエス行途の倦疲にて其井の傍に坐せり時は晝の十二時頃なりき七一人のサマリアの婦水を汲んとて來りければイエスその婦に向ひて我に飲せよと曰ふ八蓋弟子たち食物を買んために邑へ往て在ざりし故なり九サマリアの婦いひけるは爾はユダヤ人にして何ぞサマリアの婦なる我に飲

ことを求るや此はユダヤ人とサマリアの人とは交際を爲ざれば也十イニス答て曰けるは爾もし神の賜と我に飲せよといふ者の誰なるを知ば爾われに求めん然ば活水を爾に予ふべし十一婦イエスに曰けるは主よ汲器なく井も亦深し爾何處より汲て其活水を有るか十二この井は我儕の先祖ヤコブの予し所なり彼其子も亦畜までも皆これを飲たり爾は彼よりも勝れし者なる乎十三イエス答へて曰けるは凡て此水を飲む者はまた渴かん十四然ど我あたふる水を飲む者は永遠かわく事なし且わが予ふる水は其中にて泉となり湧出で永生に至るべし十五婦いひけるは主よ我が渴ことなく亦この處に水を汲に來らぬ爲その水を我に予へよ十六イエス曰けるは爾ゆきて夫を呼び來れ十七婦こたへて曰けるは我に夫なしイエス曰けるは夫なしと言るは理なり十八蓋なんぢ曩に五人の夫ありて今ある者は爾の夫に非ず爾の言しは眞なり十九婦いひけるは主よ我なんぢを預言者と知る二十我儕の列祖は此山にて禮拜

せしに爾曹は禮拜すべき處はエルサレムなりと曰ふ二一イエス曰けるは婦よ我を信せよ唯に此山のみに非ず亦エルサレム而已にも非ずして爾曹父を拜すべき時きたらん二二爾曹の拜する者を爾曹は知ず我儕の拜する者を我儕は知るそは救はユダヤ人より出るが故なり二三眞正の禮拜者靈と眞を以て父を拜する時きたらん今その時になれり夫父は是の如くに禮拜する者を求め給ふ二四神は靈なれば拜する者もまた靈と眞をもて之を拜すべき也二五婦いひけるはキリストと稱るメッシヤの來らん事を知る彼來らん時凡の事を我儕に告ん二六イエス曰けるは爾と語る所の我は其なり二七時に弟子きたりて彼が婦と語れるを奇みけれど其何を求るや又なに故これと語れるか問る者も無りき二八婦その水瓶を遺して邑にゆき人々に曰けるは二九我すべて行ひし事を我に告し人を來りて觀よ此はキリストならず乎三十是に於て人々邑を出てイエスの所に來りぬ

斯の如くキリストの福音は天下に弘むべき者なること初よりして然りし也、唯物事に本末あり、緩急あり、時宜に從ひて基督は舉措ふのみ、恰も孔子が政を問ひ又は仁を問へる者に向ひて、十人は十樣、百人は百樣の答をなせるが如し。要する所は病弊に適するに在り。論者の如きは人を見て法を說くの妙を曉らざる鈍根のみ。實情既に斯の如くなるが故に基督は世を去るに臨みて、其の弟子たちに

『爾曹遍く世界を巡りて萬人に福音を宣傳へよ』

と遺命せりとは福音書の皆均しく記する所ならずや。然れば論者の如く基督がカナンの一婦人に方便上言たりし片言隻句を執へて、ヨセフスが金鐵の言辭を打消さんと試むるは、豆腐を發射して堅塞を擊ち碎かんと務むるに髣髴たり。況んやヨセフスの所謂『異邦人』云々は傳聞と結果とに基づける者にして、固より親炙目擊の餘に成れる者には非ざるをや。

次に論者はヨセフスの此の記事が三四世紀の交に至りて始めて基督教

會史家ユウセビウス(Eusebius)の引用する所となりたるを見るや、是れを教會史家が揑造せし者にして、其の前には全く存在せざりし也と主張す。是また殆んど兒戲に類する抹殺說と謂はざる可からず。幾百千年間何人も引用せずとも、老子は老聃の書きたる者、莊子は莊周の書きたる者なり、幾百年間引用されずとも、ハムレットはシエークスピアルの作、失樂園はミルトンの作なり。凡そ文章や詩歌は必要なければ引用せられず、且何人の著作といへども其の全部を悉く引用せらるゝ者は極めて尠なし。恐らく聖書を除きては古今絶無なるべし。ユウセビウスは基督教會史を書くべく其の該博の知識を以て遍く好材料を蒐集し、遂にヨセフスの該大歷史に逢着し、以て之を引用したるならん。當時は印刷の術未だ發明せられず、悉皆羊皮に書きし寫本なりければ、ヨセフスの歷史の如き卷帙浩瀚なるものは、其の世に行はるゝ極めて少なく、決して戶々に藏し得べき者に非ず、殊に猶太亡國民の歷史としてや需要も亦必ず多からざりつらん、況が聖書の如く普く世に傳唱

せられざりしは固より當然の事にして、吾人は寧ろ該書が全體として今日に存するの異數なるを想うて、其の固有なる價値の大なるに驚歎する也。

然のみならず、今該歷史につきて熟閱するに、本章の一爭點たる彼の記事は全く前を承け後を起す聯鎖の要文にして、若し此の一段節をユウセビウスの挿入とせば、該篇全體も亦ユウセビウスの僞作と爲さざる可からず。按ずるに、當時は(本書の初にも論及せし如く)アリウスといふ大宗教學者ありて異端を唱へ出しユウセビウスも亦之に加はり、天下の諸監督は悉く尼契亞府に召集せられ、甲論乙駁の後終に羅馬皇帝コンスタンチンの御前會議を開きし如き次第なりければ、ユウセビウスにして若し該一段節をヨセフスの歷史中に挿入したりとせば、諸他の宗教學者これを不問に措くべきや、必ずや一齊に起つて彼を攻擊せしならん。斯の如く此種の揑造說は孰の點より觀じ來るも辯護の餘地些かだに無き者とす。然るに此外にも亦種種の證據は直接或は間接に存在して、容易に抹殺し得べからざる者あるを奈何

せんや。第三章に引揭せし羅馬の史家タシタスの紀年史（アンナルス）に載せたる基督教徒迫害記事の如き是亦斷じて動かす可からざるものなり。タシタスはネロ帝(Nero)が一は自己の汚名を除かんと欲して、羅馬大火の罪を基督教徒に歸し、以て之を嚴刑酷罰に處したる由を暗示す、是また當時に於ける一般の迫害事情と相符合するものにして、古來の傳說能く之を是證す。只基督教は博愛を唱ふる者なるに、羅馬人が往々人間憎惡罪に基督教徒を坐せしめたるは（タシタス、を見よ）、誤解に非ざれば讒誣のみ。羅馬人中にも（後に說く如く）早くより基督教を研究して陰に陽に奉せし者貴賤貧富となく頗る多かりしと雖も、官吏及び學者社會には、毫も之を究めずして、只蛇蝎視せる者夥しかりき。故に學者輩が種々の動機よりして基督教を罵詈讒誣しつゝありし間に、一般の人民は早く既に熱心なる基督教徒と成りてありし也。コンスタンチン大帝此の形勢を察知したれば、一たび奇異の幻象に接せるや、倏ち基督教を羅馬の國教と宣言し、一たび此の千歲可記の詔勅を發せるや、羅馬帝國は早

くも既に基督教國たりし實をあらはしぬ。要するにコンスタンチン大帝は實は天下の大勢に驅られて茲に到りしものとす、一箇の私見を以て基督教を國教となせしには非ず。

幸德氏等の抹殺派はタシタスの書ける如き基督教徒迫害事件は一も羅馬に無かりし由を喋々しタシタスの該記事を後人の僞作とし、其の常には否認する使徒行傳の記事を自家に都合宜しき時には誠しやかに引證し、說を爲して曰く、——

基督教徒は果してネロ帝在世の時、即ち保羅が羅馬に住して福音を宣傳せるの時斯る殘虐の迫害行はれしと主張する乎、然らば即ち彼等は新約書中、使徒行傳及び羅馬書の說く所を如何に解せんとする乎。見よ。

使徒行傳第二十八章の末尾は曰く「斯くてパウロその借受けし家に居りしこと全く二年、すべて來り見んとする者を接へて憚らず神の國

をのべ、主イエスキリストの事を教へて禁げらるゝこと無りき」と彼れは公然福音を說て憚ることなく、何人も之を禁ずるものなかりし也。

羅馬書第十三章の初めに曰く「上に在て權を掌る者に凡て人々服ふべし、蓋神より出ざる權なく、凡そ有るところの權は神の立て玉ふ所なれば也。又曰く「有司は善行の畏れにあらず、惡行の畏れなり、爾權を畏れざることを欲ふ乎たゞ善を行へ、然らば彼より褒を獲ん……彼は徒らに刃を採らず、神の僕なれば惡を行ふ者に怒りをもて報ゆる者なり」と。保羅及び基督教徒の眼中に在て當時帝王有司は實に善を褒め惡を懲すべき神の忠僕なりし也。

論者は使徒行傳に於て聖保羅が羅馬府へ到れる所以の事情を審かにしたりしや。果して然らば、如何に抹殺論者とて斯る愚かしき質問をば發し得ざりしならん。先づ

聖保羅は教敵たる猶太人より誣ひ訟へられて、牢舍の身となり、元來羅馬公民の籍を生得したるが故に擅妄の懲罰を排けて、特に羅馬の法廷へシーザルへ上告せし者とす、彼既に羅馬の市民なりければ正式の裁判なくして は罰せらるべからず、因て原告の上京を待つべく名義のみ拘禁せられてありしかば、固より德望高き偉人として獄史に敬愛せられ、隱然信徒及び求道者への講話は容されてありき、是れ特別の場合なり、基督傳道者の皆然りしには非ず、今日に於てもトルストイは言論の不自由極まれる露西亞に在りて其の言論極めて自由なりしに非ず や。非常の人は非常の待遇を受くべし、併しながら其の保

羅すら終に羅馬に十字架の死を遂ぐと信ぜらる。

第二の點、即ち羅馬書第十三章『上に在て權を握る者に凡て人々順ふべし』云々に至りては、是れ聖保羅が羅馬に於ける基督教徒に政治と宗教の混同を戒めたるものとして有名なる大文字なれば、論者の如く沒常識の非難を之に加へられては、實に沙汰の限りにして、開いたる口の塞がらぬを覺ゆ。

最後に、羅馬の史家スウエトユウス(Suetonius)は基督紀元後六十五六年に生れし者なるが、是亦基督教徒が羅馬に迫害せられたる由を記せり、云く『新奇にして妖術めける迷信を有する基督教徒てふ一團の人民處罰せられたり』と、嗚呼論者は玆に至りて何と言はんとするか。

スウエトニウスは又クラウデウス帝の詔を發して『凡てキリス

トてふ者の教唆に由て常に叛亂を起す猶太人を羅馬より逐へる』由を記したりしが、是また羅馬史家の傲慢と不精密(後者は前者に產る結果)を暴露せるものなれども、兎に角クラウデウス帝が羅馬より基督教徒を逐ひたりしを報ずるだけは正確の事實と認めざるを得ず、如何となれば偶然にも此の事使徒行傳中に說き及ぼされてあるを見れば也。使徒行傳第十八章に記して曰く、——

此後パウロはアテンスを離れてコリントに至る　二　近頃イタリヤより來れる者にてポントに生れしアクラと名るユダヤ人および其妻プリスキヤに遇て其所に至れり彼等がイタリヤより來りしはクラウデオ帝ユダヤ人に盡くローマを去れと命せしに因てなり　三　彼その業を同くするに由て之と偕に止りて工を作ぬ其業は幕屋を製る者なり　四

斯てパウロは安息日ごとに會堂に於て論じユダヤ人とギリシャ人を勸たり五シラスとテモテマケドニヤより下たる時パウロユダヤ人に向てイエスのキリストなる事を證し道を傳ふることに心を凝し居り」

論者は此等の記事に甚だしく困却し、遂に一方の血路を開き得て例の詭辯を逞しうしつゝあり、卽ち論者はスウエトニウスがキリスト Christ をキレスト Chrest と誤り書けるを奇貨措くべしと爲し、キリストとキレストとは全く別人なりと曲解し、以て天下の耳目を瞞過せんとす、幸德氏乃ち說を爲して曰く、——

「夫れ然り、四福音書に從へば猶太人のクリスタスは猶太の地に活動し、紀元四十三年の頃に磔殺されたりき、シウトニアスに從へば其後數年の間、同じく猶太人のクレスタスなる者は羅馬に住して斷えず叛亂

を煽動し、クリスチアンなる黨與と名と之に依て起りたりき。前者僞乎、後者眞乎、彼等基督敎徒にしてシウトニアスを其證人となさんとせは、是れ神聖なる四福音書を破棄する者にあらずや、少くともシウトニアスは基督なるナザレの耶蘇の存在を證明する者に非ざる也。」

窮せる哉、何等の笑止！

但し玆に基督及び基督敎徒の存在及び勢力に關して何人も抹殺の筆を弄し得ざる一證蹟あり、并は他なし、老プリニの猶子にして、文名嘖々たりし少プリニ (Pliny the yourger) が基督敎徒の待遇及び處分につきて羅馬皇帝に意見を上奏し且訓示を請ひたる書翰なりとす。少プリニは基督紀元後六十二年に生れ、百十五年頃歿せしが、特にトレージャン帝に寵遇せられ、遂に出て小亞細亞のビテニア (Bithynia) に總督たるや羅馬人の嫌惡する基督敎徒が其の管轄內に甚だ衆くして、餘りに之を放任せば或は羅馬帝國の政策に背馳せんことを恐れつゝも、亂臣賊子に非ざれば妄りに嚴刑酷罰を加ふる

に忍びず、因て先づ基督を敎祖とする基督敎徒の性質及び行動を不精密ながらも略叙し、而して之が處分法をトレージャン帝に稟議したり、暗に其の一般に寛假せられんことを要望したるは言外に明かなり、而して皇帝は優渥なる詔を垂れて彼が志を成さしめたり。此の名士は出でゝ總督たりしだけ他の羅馬人も稍々撰を異にし頗る時勢に通じ自ら筆を援つて『世界現代史』と題する書をさへ著はせしが、惜い哉今は世に傳はらず、只其『書翰集』Epistolae 現存する而已而して該の重要なる書翰（上表の類）は其の中に發見せらる。論者如何に詭辯を揮ふとも、此の政治的事實を羅馬帝國の歷史中より抹殺し去る能はじ。少プリニは前に引きたるスウエトニウスと相親しかり彼に與へたる書亦數通說書翰の中に在り。プリニは基督紀元後百十五六年は百十年頃逝去したりと云へば、該上書は第一世紀の末に書きし者なるべし。幸德氏等もさすがに此の書をば持て餘し、左の曖昧なる言辭を弄して之を糊塗さんと試みたり、笑止千萬なる哉。

『テーラーの如きは當時羅馬の信敎極めて自由にして、基督敎迫害のことなかりしを說き、少プリニーの書も亦た後世基督敎徒の僞作に出でざるやを疑へり。假りに之をもて眞にプリニーの手に成るとするも、吾人は之に依て唯だ基督敎徒一派が第二世紀の初めに於て頗る蔓延せることを見るのみ、彼等が卑陋なる迷信の徒にして、甚だ論ずるに足らざる者なりしを見るのみ、彼等の信仰せる本尊が基督と名くる者なりしを見るのみ、是れ初めより吾人の否認する所にあらず。

然れども少プリニーの上書を精讀すること再三再四なるも、彼が基督眞個の存在を確知し證明するの字句に至つては、毫も之を發見するを得ざるを如何せん。』

何等の沒道理ぞ。プリニは基督敎の爲に證明論を書きし者には非ずと知らずや。

第五章

基督又當時に知らる

聖書以外猶太古典中の傳說

英雄豪傑にして當時の歷史或は記錄に其の傳を見ざる者世界に甚だ多きことは既に說けるが、偶ま當時に其の反響を存すとも、亦往々誤解に出たる者なるを見ん、殊に其人にして若し當時に容れられざりし者ならんには、最も然る者とす。其の世に出し當時に誤解さるゝは寧ろ英雄の本色とも謂つべし。只、其の誤傳謬記に由りて其の人の存在を認むれば足れりとす。

基督其の當時に知られざりしとは蓋し皮相の見にして取に足らず。猶太の古典を按ずるに、タルムード書中基督の事を記せる文字散見す、只敵人の筆として譏誣の障壁々たるは蓋し數の免れ難き所ならん歟。猶太の古典

タルムード Talmud は一種の『會典』類にして、萬般の記中其の中に輯錄す、然るに、猶太博士の中に孔子の擊に倣へる者あり、タルムードを刪定し、其の一見荒誕不經なるが如き箇處を除きたりと見ゆ、故に刪定本と不刪定本との二種あり、其の不刪定本の中には往々基督の妄傳を載す、是豈當時の事情に照らして最も肯綮を得たる者と稱すべからずや、即ち不刪定（不省略）タルムード書中には基督を種々の名もて誣記したるが、其の中には往々間接に基督の存在、埃及行及び奇蹟等を證明するものあるを見るべし、曰くヨシュア、ベン、ペラホヤといふ博士あり、暴君の及を避けて其の弟子とともに埃及へ逃れたりしが、基督も其の弟子中に在りて埃及に學びたりしに、後墮落して破門せられたりと、斯く基督を『墮落して破門せられたり』と書せるは、基督が卓絕なる新見を以て舊染の汚俗弊習を排斥したるを誣說したるものにして基督を十字架に釘したるの精神に外ならず、敵人の筆になれる傳記は大抵是の如き者とす、然れども之に由つて基督の存在は優に證明せらる。福音書

に依れば、基督は幼時博士たちの中に立ちて滔々と辯論を闘はしつゝありしと云ふ。兎に角、基督が幼よりパリサイ宗徒の妄見に唯々諾々として聽從せざりしことは明白にして、其の證跡は斯く二重なるを奈何せんや。

論者はヨセフスが基督の奇蹟を行ひし由を記せるを見て是れ後人の僞作竄入のみと主張すれど、斯かる偏狹固陋なる見解は齒牙にだも懸くるに足らず。所謂奇蹟の眞に行はれたる事は余輩既に『二十世紀聖書新釋』の中に縷述したれば茲に贅せずと雖も、例の不刪定タルムード書の中には亦基督の事を罵りて、彼れベン、スタダは魔術を埃及より携へ來りて、之を各地に街ひ行ひたりと說けり。論者の如きは寧ろ盲蛇の嫌なきに非ず。

猶太の緯書タルムード、ミシナ等の中には他の聖賢――例へばヒルレル、シャマイの如き者――を傳し、其の言行を記する頗る詳かなるあり、往々基督の語をすらも彼等の口に置けりと見る。是等と出入して基督の事跡(と稱する者)を錄せり、ヒルレル(Hillel)やシャマイ(Shammai)に關する點々は論者

これを信ずるに只其の遲からんことを恐るゝに獨りキリストに關する件は、之を信ずるに他くまでも客ならんとするは、人情の偏僻も吁嗟亦奇なる哉、是れ上にも已に言ひし如く世人が往々シエークスピーアルの靈筆を疑ひて、之を他の亞流に歸し、以て得々たる色あると同日の談のみ。

論者は又屢ばヨセフスの大歷史中に基督を傳せる甚だ簡短なるを見て基督の不存在を證せんと試むれど、タルムード書中に彼が如く委きヒルレルシャマイ二師の話がヨセフスの史中に殆んど其の影だも見せざる事實をば論者如何か說き去らんとするや。

然のみならず、論者はまたアレキサンデーリアの猶太哲學(philo)の事々喋喋として、フキロ彼が如く當時に名高かりしに、基督は然らずと言ふと雖も、是亦大に誤まれり、フキロは著書多くありしが故に、世の著述家學者等彼を論評し稱譽したる耳、然れどもヨセフス(Josephus)は唯僅々數行の文字を以て彼を引き揭げたるに止まれり、而して其の記事は只彼が猶太人の使節と

して羅馬へ往けるの一事に限れり、之をヨセフスがキリストを傳せるに比ぶれば輕重の差霄壤と謂はざる可からず、卽ちヨセフスは其の猶太史中に記して曰く

時にアレキサンデリアに於て希臘人と猶太人との間に騷擾起りしかば、雙方より三名の委員を選出して羅馬皇帝カイヤス(Caius)に訴へしめしが、希臘方の委員中にアピオン(Apion)と名くる者あり、猶太人の不忠不臣なる事を皇帝の前に讒奏せり、然るに猶太人側の委員長にフヰロ(Philo)といふ者あり、哲學の造詣淺からず、起つて此等の誣告讒奏を辯駁せんとせしに、皇帝之を禁じて彼に下がれと命ぜしが、其の態度極めて震怒の大なるを示して、如何なる暴戾をも猶太人に加へかねまじき勢なりしが故

に、フヰロは敢て逆らはず、出て周圍の猶太人に告げて曰く、諸君落膽する勿れ、皇帝は我等を怒りたれども、天に戻りたれば、必ず長久ならじと」

唯是のみ、是れ果して論者等が持するフヰロ尊揚說と相容るものなりや、フヰロは一大哲學者なること毫も疑を容れずと雖も、羅馬皇帝の前に使ひして一言の辯明をも爲し得ずして、退出したりとは、餘りに譽めたる話にもあらじ、論者の如くヨセフスが極口彼を稱讚したりとは斷じて言ふ可からず

論者の妄評妄計も亦驚き入りたる者ならずや。

論者が百方基督を抹殺せんと努むるは、恰も偏狹嫉娼なる批評家が只管シエークスピーアルを抹殺せんと計るが如くなりとは、前章に既に言ひたり、按ずるに、天下の眞理は決して一人の專有物に非ず、極初よりして聖賢の之を道破せるあり、要する所は之を一新して以て時弊を救ふに在りとす、或る人來りて耶蘇に問うて曰く、「諸の誡命の中何を以て最も大なりとするや」

と、耶蘇乃ち之に答へて曰く、

「誠實を盡くし、心を盡くして主たる汝の神（天帝）を愛し奉るべしとふ是なり。」

是れ直ちに道德の根本を拈出したる明答にして、當時の弊を矯むるに尤も適切なる者とす。然れども此の語は是れ全然基督の發明せる者に非ず其の昔ソロモン已に此の精神を說きて、

「神を畏るゝは智慧の始なり」

と言へり。其の異なる所は只「神を畏る」といふと「神を愛す」と云ふに在る而已。是れ或る意味に於てや宗教思想の一大進歩と謂はざる可からず。

按ずるに神を畏敬するは固より惡きに非ず、否是れ一切の智慧の始とさへ稱へらる。孔子も君子の三畏を說きぬ。然しながら父を畏怖するは父を敬愛するの親厚なるに若かず。上古の民は天を畏れ神を畏れて身を修め德を磨きたりしが基督は天帝を親愛して「天父」と稱へたれば「畏神」を措きて專

ら「愛神」を說けり。汎愛的人道の主義實に其の淵源を茲より發すと謂ふべし。基督の所謂「己を愛する如く其の隣人を愛せよ」（己の如く人を愛すること）は此の愛神主義の反映せるものとす。

斯の如く聖賢の名言にして、上古に起因せる者鮮からず、必ずしも其の之を言へる特別聖賢の創思に限らず、且又千古の金言の如きは東西古今の聖賢特自各別に之を發明し之を吐露せる多し、是れ聖賢の聖賢たる所にして、必ずしも貸借を議すべからず。

然れば左の一佳話の如き、猶太綺書タルムードの中に見ゆるとは雖も、必ずしもヒルレルを以てイエスの師と爲すべき確證には非ず、或は基督の名言を猶太博士等がヒルレルの口へ溯り移したるものならんも知るべからず。

『嘗てシヤマイ Shammri 及びヒルレル Hillel といふ二大賢哲あり、衆庶の尊崇を受くること頗る大なりき。或る日、一

外人シヤマイ師の許に到りて、請うて曰く、『願はくば奴某を先生の門弟と爲したまへ、但し先づ先生は奴某が片脚にて立てる間に全律法を悉く誨へたまはざる可からず』とシヤマイ博士これを聽くや大に怒りて、其の持てる杖を振りあげて、其の人を戸外へ逐ひ出しぬ。

其の人去りて、ヒルレル博士の門を叩き、請ふて同一の願望を以てせしに、ヒルレルは之に答へて云く、汝の好まざる事を汝の隣人に爲すべからず、全律法は此の中に在り、其の餘は皆之が註解のみ、去りて、之を服膺せよ』

是れ古來有名なる佳話とせらる、然り、眞に佳話なり。基督は如何に敎へたりしや。所謂山上垂訓中には記して曰く、

『汝等求めよ、然らば與へられん、尋ねよ、然らば遇はん、門を叩けよ、然らば開かれん。汝等の中誰か其子麵麭を求めんに石を與へんや、又魚を求めんに蛇を與へんや、汝等惡き者ながらも佳き物を其子に與ふるを知る、況や、在天の父は求る者に善き物を與へざらんや。是故に、汝等は凡て人の己れに爲すを欲する事を亦其如く人にも爲せよ、律法と預言書は悉く此中に在り』

此の種の言句を比較して直に其の貸借を論ずるは愚のみ、眞理は眞理として聖賢の口に發す。夫の論語を見ずや、子貢已に孔子に向ひて、『賜や人の己に爲すを好まざる所を人に施す無からんを欲す、如何ん』と問へり、孔子は『其の門弟子を敎へて、己の欲せざるを所を人に施す莫れ』と諭せり。子貢は之を孔子に學びて言へるに非ず、孔子は却つて汝の及ぶ所に非ずと歎せり。實際の

師弟たる孔子と子貢の間に於てする其の貸借を說く可からざる是の如きものあり、況んやヒルレルと基督の如き一は父祖の傳說的儀禮虛式を守るを善しとし、一は全然斯かる繁縟的或は煩瑣的慣例及び『遺傳』を排けたる者に於てをや。殊に上掲のシャマイヒルレル比較談の如きタルムードの記事は、多少演劇じみて、實際の出來事とは思はれず、却つて基督の山上垂訓裏に於ける所謂金則なる者を以て情理の自然に出でたるものと認めざるを得ず。

(註) ルナンやガイゲルは基督を貶せんと心がけし者なるが故に、タルムード書中に適ま見えたるシャマイヒルレル比較談に非常の重きを置きて喋々すれども、是は畢竟夫の『集大成す』といふ事をすら辨へざる戲論にして識者の傾聽すべき價値毫も之れ無き者とす。ヒルレルは巴比倫は生長せし者と稱し、見聞も衆に超えをり、學識深遠なりし如しと雖も、猶彼は尋常のラビ(猶太博士)にして、決して基督の如き大革新家にあらざりき。然れば或人彼が許に

往きて聖書以外なる歷世の遺訓傳說は果して守るべき者なるやと問ひしに、答へて、遺訓傳說亦宜しく守るべしと斷言せり。是れ革新家の言にあらず弊風惡俗をも容忍して恬然たる者なり。基督は斯かる場合に何と應答したりしや。基督は叱して言へり、汝等は繁褥虛禮なる先祖の遺訓傳說を守り、却つて健全醇素なる天帝の誡命を破るなりと。其の辭痛切、直ちに骨を刺せり今其の一例を擧げんに、安息日(今の日曜の類なり)は天帝の安息日なれば、一切の行動を休むべく、善きにまれ惡しきにまれ働らくべからずとは、是れ所謂先祖の遺訓傳說なる者にして、安息日には旅行をさへに禁じ、若干事以上には步行だもすべからずと爲せり。基督は此の弊風を打破して曰く、安息日は人間の爲に設けられたる者なり、人間は安息日の爲に設けられしに非ず、安息日に喜事を行ふに何の不可かあらんやと。是れ大革新家の辭なり。

ヒルレルは如何、彼亦決して凡庸漢ならずと雖も、其の擧措は必ずしも悉く天下を覺醒し得べき者にあらず、彼若かりし時、先輩シマヤとアブタロン

の門下に講義を聽かんとて、安息日に來りて室外に雪中に立ちをりしに、降雪霏々として殆んど彼が體を埋めをはらんとせし際、偶まシマヤの認むる所となりて、室内へ救ひ入れられ、溫湯に浴せしめられ、身に膏を塗られて、凍死を免れ得たりとぞ、但し斯く安息日に人を雪中より掘出して、之に沐浴せしむる如きは、當時の獨太人民の眼中には安息日を破る者と見做れをりたるが故に、世人既にヒルレルの俊才を認めてありしものか、言ひけらく「斯人の爲には安息日を破るも罰あたらじ」と、之を要するにキリストとヒルレルとの間には太陽と月との如き差ありて存す、米哲ヘーグッド氏は其の『基督人物考』の中に於て實に左の奇拔なる推論を吐露せり。

基督は福音記者の揑造物なるや

ナザレの耶蘇とは誰なる乎、何者なる乎、我等が基督敎と稱する者の全體は此問と之が答の中に籠れり。

若し所謂耶蘇の如き人物が曾て世に存在せざりしことを確證を擧げて論定し得たらんには、活動力としての基督敎は世界より消滅し去らんのみ、固より尙一種の歷史はあらん、世人の嗜好に隨ひて之に興味を與ふる一種の文學はあらん、然れども凡そ人として良心を有する者の遵守せざるを得ざるが如き、且つ各人に希望を與ふるが如き、自から活力ありて能く他を活動せしむる眞理絕えて無からん之に應ずるの義務を本體とせる人心を感化し世界を高尙にする宗敎は絕えて無からん。是より從事せんとする議論に於ては特に明瞭にして疑を容る可らざる者の外は何事をも臆斷せざるべし。

「福音」と稱する小冊子が天啓に成れる者なりとは臆斷せず、また何にまれ耶蘇が行ひたりと云ふ奇蹟を彼れが神性の證據と見做されんことをも諸君に請はざるべし。彼は又耶蘇の神性を證するために聖書中の明文證言をも引かじ。

先づ第一に提起すべき疑問は左の如し、曰く、福音中に記されたる耶蘇の如き人物が曾て實際に存在したりしや、耶蘇は眞にナザレに住居しヨセフの店にて業を執りしや、果して三年六ケ月ばかりが間諸處を徘徊巡遊して人々を敎へしや、果してヘロデ、ピラトの世に耶蘇てふ人物は例へばシーザル(カイザル)のありしが如く確かに有りしや。

馬太、馬可、路加、及び約翰が書きたりといふ四個の小冊子(――日々尋常の人物につきて世人が書く所の者に比すれば此等の書は如何に小なる者ぞや――)の中には、耶蘇として我等に知られ、また一般の歷史上にも知られたる一種特絕なる人物ありて存す、此事だけは極めて明確なりとす。此等の小冊子は之が帶ぶる名の人々の實際に書きし者なるにもせよ、或は其名の傳はらざる人々の書きし者なるにもせよ、其は毫も本論に影響を及ぼさず、凡そ書中に載せたる所の件

は其著者の誰なるやてふ問題よりも重要なればなり。誰れの書きしに拘はらず、我等が耶蘇として知れる人物は此等の小冊子中に灼然として在り。此事は爭ふ可からず、我等の眼前に歷然として存す而して此人物は我等が福音記者と稱する四人の書中にあるが如く、歷史上にも人類の思想中にも凡そ我等が基督敎的文化と稱する者の中にも亦同じく確かに存在す。

啻に此人物あるのみならず、我等は又全然特絕無二の人物なることを明かに見る。此人物は悉くの點に於て特絕なり、されど殊に左の一點に於て特絕なりとす、卽ち是れ古來歷史中にも人の思想中にも未だ曾て世に現はれたることあらざる完全無缺の唯一人物なることにぞ有る。諸君も知れる如く、或る著述家は耶蘇卽ち四福音中に記されたる耶蘇が曾て實際に人として此世に生存せしといふことを否認せり。單に書籍中に於て否認するよりも遙に重大なるは、數千の

人々が夫の福音記者の記せる物語は現實に生存したる人の傳記なりといふことを、衷心の識能を以て會得し能はざることなり。耶蘇が實際に生存せしといふことを否認し、或は疑ふ人等に向て、我等は福音書中に此人物の存在する緣由を說明せんことを求むるなり。彼等は此說明を爲さゞるを得ず、如何となれば此人物の記事のあることは否む可らざればなり。世人の眼前に明記しあり、また其思想中にもありて活動す。此人物は啻に此等小冊子中に記しあるのみならず、他の千萬卷の書中にもあり。昔し此四名の記者の心中に在りしのみならず、今日に於ける億兆の男女老幼の心中にもあり。人若し歷史上の耶蘇の存在を否認し或は疑はゞ、如何にして此完全無瑕なる人物が人の思想に入り、今ま歷史、文學、技術、法律、習慣、人生其ものゝ中に存在するやを說明せよ。或る論者の流は耶蘇が實際に世に存在せしことを否認しつゝ、此等物語中の耶蘇は福音記者等が揑造せし所なりと

いひて、此人物の存在を說明せんと試みたり。彼等曰く、所謂耶蘇は今日に傳はれる其言行の短記錄に名を署したる四名の人の戲劇的文才によりて造出せられたる者なりと。此四名の人が此等冊子を記せることを否認して、名の知れざる他の記者が此人物を揑造せりといふも、此論點は變更せざるなり。

我福音と稱する四個の福音記者の小冊子を熟ら講究せよ。如何なる記事のあるやを見、之を書したる人々は何者なるべきやを知らんと試みよ。若し理由の有るあらば、全く此等の書を棄つるも可なり、されど此一事を留意して老察せよ。卽此等の記者は戲曲の著作に馴れたる者なりしや、否な實に斯る著作を爲すの能力を有したりや否やを老へよ。彼等が著書中には、馬太、馬可、路加、約翰は文學家にも非ず、著作家にも非ざりしとの證據充分に具はれり。彼等は文學を修めず、また之に熟練せざる通常人にして、俗人として薰陶を受けたる勞働營

業の人なりし。彼等が生活はヒブライ文學史の此時代に屬する誠に微弱なる文學思想を支配せる職業や、感化よりも遠く離れたる生活なりし。

余は結論して曰く、福音記者が何等の戯曲をも、之を作らんと試みたることの先天的に信ずべからざるは、猶ほ以下に論證するが如く、縱ひ彼等が之を試るも、彼等が彼の「ガリラヤ人」に就きて我等に告る所の如き物語を揑造することは、到底彼等の爲し得べからざる者なるに均しと。

戯曲家は己よりも高き人物を描くこと能はず

耶蘇に關して余が顯揚する敎說は是れなり、曰く、斯る人物を想得するには、其根據として斯る人物の實際に存在するを要す、何となれ

ば斯る人物を創造するの力はヒブライ人の智力にも、他の如何なる人の斷力にも、斷じて之れ無かりし所なればなりと。

請ふ茲に如何にして余の思想が本書の論法を執るに至りしやを諸君に語らん。

千八百六十一年の四月中、余は當時ジョルヂャ州スパルタの牧師なりしが、一日ヒウ、ミルラルが著書中の「英國と其人民に就ての初感」を讀み居りたり。余の爲めには爽快にして有益なりし此書の著者は、其のシエクスピールの墓に詣でたる際、大詩人サー、ウヲルタル、スコットとチヤルス、ヂツケンスとを比較したることを記せり。

ヒウ、ミルラル曰く、「戯曲家は、如何に試るも己より高き人を描くこと能はず」と。余は諸君中の一人に此書を貸し久しく之を見ざるが故に確とは其用語を記憶せざれど、大意に於ては斯の如き語なりしと信ず。余は卷を掩ふて自ら曰く、「然らば馬太、馬可、路加、約翰は耶蘇を揑

造せざりしなり」と。

然り、如何なる戯曲家も己れより高き人を描くこと能はず」と。ヒウ、ミルラルの意は、著述家が己れに勝りたる偉人の事を記する能はずといふにあらず、己れより偉大なる人物を構立捏造する能はずといふにあり。是れは格物學にて水は其平面より昇ること能はずといへる格言の如くに明瞭なる者なり、所造は能造より偉なること能はず。

我等が自己よりも「高き人」の事を記すは極めて通常の事なり我皆な之れを爲す。諸君は單に大學生たりし時、クロムウエル、ワシントン、グラッドストーン、ビスマルク、其他不出世の人に就て論說を書くことを躊躇せざりし、諸君之を記憶するならん。余は一少年がソクラテスの事さへも可なりに善く記述したるを知れり。されど彼れは百科全書等を有せり。彼れは此智慧ある善き年老哲人を創造せしに非ず、自己の思想よりして自力を以て之を創想し出さゞりしなり、

諸君は此等四名のユダヤ人、即ち福音記者が、我等が耶蘇として知れる人物を捏造し得たりや否やを考ふるに方りて、當に記憶すべし、即ち彼等若し之を捏造せんとしたらんには、先づ自からユダヤ人一般の思想及び感情を脫離することを要せしなりと。縱ひ彼等戯曲家たるの技能を具へたりとするも、彼等の棲息せし境遇は斯る人物を捏造するを到底ゆるさゞるなり、彼等は其棲息せし社會、智識、及ひ道義の空氣を呼吸しながらに、斯る人物を捏造することは到底爲し得べき事に非ざりしなり。蓋し此人物、即ち福音記者が記せる耶蘇は、ユダヤ人種の固有の品性及び當時社會を支配したる諸勢力に諧合せず、此等の品性勢力には事毎に反對すればなり。

縱ひ盲信をも驚倒すべき智力上の奇蹟ともいふべき事を容諾しつゝ此等四人は古來諸國に於て未だ曾て人の爲したること無き事と爲し、其棲息せし境遇の諸勢力に打ち勝ちて、斯る人物を捏造する

の第一要素を具有したりと假定するも、尙ほ彼等の書中に顯はれたる彼等の能力に徵し、世に耶蘇を現出せしむるほどの大戯曲を構造するが如き智力的心靈的、偉業を爲し遂げ得べかりしや否やを考究せよ。

斯る偉業を爲すには、彼等は耶蘇の敎へし廣大なる敎訓を構造するほどの廣深崇高なる智力を有せずばならざりしなり、而して是れ實に彼等が爲す應かりし業の最小なる者といふて可なり。

此等四人が耶蘇の敎訓を構造したりとは余は決して信ずること能はざるなり。斯る大思想を立つるに必要なりと歷史及び哲學が示す所のものを彼等は全く有せざりしなり。

然れば福音書中に世人が當時基督の言動を評して未だ斯人の如く言ひし者あらず、未だ斯人の如く計りし者あらずと歎せしと記載されれるは强ち誇張の言と謂ふべからず。

第六章（問題承前）

基督敎徒の迫害と基督の存在

『殉敎者の血は敎會繁殖の種子』

斯く羅馬の二史家タシタス Tacitus 及びスウエトニウス Suetonius 共に基督敎徒が羅馬府に於て痛く迫害せられたることを其の歷史中に記述して、毫も疑を容るべき餘地なし、而して此の事は基督敎徒の歷史また之を縷述して、詳密を極め、往々讀者をして身の毛をよだてしむ。先づ敎祖基督が十字架上に荊棘の冠をかぶりて、磔死を遂げしは言ふも愚かとして、其の十二弟子及び自餘の高足弟子も多くは逆磔焚死獸食等種々殉敎の死を致したりしが、斯かる間に基督敎會は駸々として增大し、所謂『神は救はるゝ者を日々に敎會に加へたまへり』是に於てか一種の意味極めて深長遠大なる諺は起

りぬ曰く、――殉教者の血は教會の種子なり、Semen Ecclesiae est sanguis martyrum; The blood of her martyrs is the seed of the church, 或は又單に『基督教徒の血は是れ種子』と稱す。Semen est sanguis lehristianorum――The beard of lohristians is seed.

斯の如く顯著なる事蹟の歷然たるあるに、論者は尙も基督教徒は羅馬帝國内に毫も迫害せられざりしと主張するや。基督教會の一師父(師祖)にして侃諤一世を歷せる勇將テルタリアン(Tertulleanos, 160――230)は第二世紀の末に於て護教論(Apolsgia)を著はして、大に異教徒が基督教徒を迫害するの却つて不得策なるを論じ、奇警の文字を列ねて天下の耳目を聳動して曰く、『敢て異教の人士に告ぐ、請ふ迫害を以て基督教徒の數を減殺し得べしと思ふ莫れ、諸君が薙ぎ刈る愈よ大なれば、彼等が繁茂する愈よ迅速ならんとす、恰も毛髮の如く然り、基督教徒の血は弘教の種子なるぞかし。』

(註) テルタリアンは昔基督教界に異彩を放ちたる非凡警拔の人傑ありしが、英豪の常として、嘗に其生涯の出來事の何時に起り、其の著書の何年

に成りしか定かならざるのみならず、其の論說中の或る者は過嚴的モンタヌス派への轉宗前に成りしか後になりしかすらも詳ならざるなり。一方に於ては、彼がモンタヌス宗徒(基督教の一宗にして、自己の嚴守薄奉を主義とせるもの)となりし後の著書にしても、其の論題が該宗の特異を其の書中に發表すべき餘地を與へざりし者もありつらん、他方に於てはモンタヌス宗徒の口氣なるが如く見ゆる峻嚴も、只是れ著者が氣象の結果なりけんも知るべからず。或はまた基督教會内の硬烈なる黨派の特質なりけんも知る可からず。テルタリアンの資質は沈毅にして重厚なりしかば、福音の精神は彼の中に在りて其の人物の性質を以て染められて見ゆ。其の議論甚だ力あり、文辭簡潔を極め、精微、尖利、深遠を以て著るし。其の才智は澁苦にして又纖細、其の熱心は彼をして萬障を睥睨せしめ、其の讀者を驅りて始んど彼と共に奇馳せしむ。然れども彼の精神は只辯護人(代言人)の精神たるのみ。虛心平氣の論辯及び

判斷を全く缺き、其の言語は粗野にして、其の筆法は思想に於ても文辭に於ても共に過大を以て見はる。

或る他の點に於てはテルタリアンの語法は甚だ出色にして且つ辯肝要なりとす。是れ基督教會の著述に用ひられし拉甸文の最も古きもの、の一なればなり。此の時までは西部教會――羅馬自身すらも――の用語は重に希臘語なりき。是れ當時に於ける一般の交通語たりしのみならず、亦是れ基督教の神語が書かれたる言語たりしが故なり。

テルタリアンの護教論(アポロジ)は其の轉宗の前に書きしものなること殆んど確かにして、其の同種類中の最上乘なる者なり。其の中に於て彼は其の以前の護教論者が提出せし論題の大概を其の特質たる雄健を以て縱横に辯明し、福音に於ても、異教の駁擊に於ても、共に多くの新議論を附加し、斯くして後世の讀者に與ふるに、基督教會の歷史と事情とに係はる種々の面白き話を以てす。彼は基督教の迅速なる傳播を

以て該教の是なるを證する者と主張せり。彼は又た基督教徒が國家に忠信なることを主張せしが、同時にまた衆聖徒の血は天罰を喚下すこと無しには流さるべき者にあらずと明言せり。彼が口氣は嘲謔と冷笑とにて充てり。彼は當時の災害及び天變地妖を迫害者の上に落來らんとする天罰の徵、或は預言と見做して得々然たりき。

モンタヌス宗徒に合するに於てテルタリアンは彼等が教會を十分嚴刻に把持せり。彼は痛く婚嫁を攻擊し、前後相次で二人の妻を娶るは同時に二人の妻を娶ると等しき罪となし、兩妻をもてる者を復歸の望なしに教會より放逐せんと欲せり。但し彼とても斯る人々の眞實なる悔改を神或は嘉納したまふならんと云ふ事をば否まざりき。之を要するに、彼は其の宗の主義持説を悉く其の最も嚴密なる意味に於て實行せしなり。

此の有名なる警句は羅馬帝國を通じて異教徒の膽を寒からしめた

り、テルタリアンは第二世紀の初にかけて大活動をなし、三寸の舌と五寸の筆を以て勇戰奮鬪せり、彼は決して戲れに異教徒とも筆戰に從事したるに非ず、實際の必要上眞面目に懸命に苦戰惡鬪したる也、此の如き著明なる事實の面前にありて基督教徒無迫害を呼ばるは頑冥なる輩輩者流と謂はざる可からず、請ふ左に基督教徒迫害の歷史を略述せん――基督の辭世後、使徒たち及び其の他の重なる弟子たちは、天下諸國に道を傳へ、福音を演べて、ソレ〳〵多くは殉教の死を遂げ畢んぬ、聖トマス一派の基督教が印度方面へ東漸し、聖ペテロと聖パウロの福音が羅馬希臘へ西漸せしが如し。

パウロとペテロが羅馬府に於ける宣教は教會の歷史上に一紀元を成せり。是れは基督教の成長に刺戟を與へたり、彼等の殉教は是よりも更に亦幾層有功なりき。是れ

は猶太の歸教者と異邦の歸教者との間に一致の結合を成就して、此の異教の首府の土を聖潔にせり。エルサレムは基督を十字架にかけ、羅馬は其の首長たる該兩使徒を一は首斬り、一は磔殺し、羅馬の全教會を血のバプテスマに浸めたり。羅馬は善かれ惡しかれ、基督教國のエルサレムとなり、バテカン岡は西方(歐洲)のゴルゴタとなりぬ。ペテロとパウロはカイザル(シーザル)の帝國よりは廣大にして永久なる靈國の根基を居たり。十字架は勝利と權力の表號として今や刀劍に代れり。

但し此の變化は貴重の血を多く流して成りしなり。羅馬帝國の官吏は、重に宗教に無頓着なりしが故に、幸ひに

も其の公正なる法律を以て、初は基督教の保護者となり(其の眞個の性質の何たるを知らずして、)數回の危急なる時に――例へばコリントに於ては代理コンスル(代官)ガリヨの手に由りて、エルサレムに於ては千夫長ルシアスの手に由りて、カイザリアに於ては方伯ペストスの勢力に由りて――パウロを來り救へり。然れども今は此の新宗教と痛く衝突し來り、偶像教と愛國心との名を以て間歇的なる迫害を起し始めたり。而して此の迫害は遂にミルビウス橋(二百十二年にコンスタンチンがマクセンスをテベル河に滅ぼせし大勝利の得られたる處)に於て十字架の旗の勝利となりて終りぬ。嚮には斯く羅馬帝國は

暫時基督教の敵の暴發を抑ゆる檢束力たりしが、今は火と劍とを以て自分公然と基督教を迫害する敵となりぬ。

是等の迫害の第一にして、パウロとペテロの殉教を包含すと教會内に言ひ傳へられし者は二ロ(又ネロと發音す)帝在位の十年(卽ち紀元後六十四年)に於て、該帝――パウロが羅馬市民としてエルサレム法廳より上告したりし該の帝――の使嗾に由りて、羅馬府内に起れり。但し此の迫害は以後の諸帝の迫害の如く全く宗教上の迫害には非ざりき。是れは無辜の基督教徒に妄りに負はせたる汚名惡評より起りしものなりとす。

終には罪惡の怪物として天下の誇となりぬ、彼は其の

兄弟(ブリタンニカス)を殺し、其の母(アグリッピナ)を殺し、其の妻(オクテービッとポッピア)を殺し、其の師(セネカ)を殺し、其の他多くの羅馬の名士を殺せり。されば己も亦三十二歳にして自殺せり。其の終を齊くせざる實に宜なりと謂ふべし。ジュリアス、シーザルの家は彼ネロに至りて恥辱を極めて斷絶せり。而して羅馬帝國は僥倖なる軍人及び冒險者の好餌(獲物)となりぬ。

斯の如き人鬼にとりては無辜の基督教徒の一大群衆を虐殺するは必ず愉快なる遊戯なりしなるべし。此の地獄の慘劇を誘起したる者は、羅馬府の怖ろしき大火にぞありける。實に此の大火事は古來歴史上最も猛烈なる、最

も悲慘なる火災たりし也。是は十八日と十九日との間なる夜に於て、パラチノス岡の邊なる大戯場(サルカス)の東南端に於る木造店の中より起りたりしが、折節強風のあふる所となりて火勢頓に猛烈を極め、消火夫と兵卒とが必死になりて之を防ぎしにも拘はらず、祝融氏の猛威六日七夜毫も衰へずして、火焔天を焦せり。然る後再び他の部分に於て、マルスの野の邊に發火し、三日間にして該府内の他の二區を燒盡せり。

此の禍は實に絶大なりき。該府が分たれたる十四區の中、只四區だけ無難にして遺れり。大戯場よりエスキリス岡に至るまでの全市内を包含する三區は全く灰燼と

なり了り、其の他の七區は多少燒失せり。而して此の世界の首府は一大墓地たるの觀を呈し、其の上には一百萬の男女徘徊して其の復たと獲がたき財寶を失ひしを哀哭痛歎せり。

此の火災の原因は秘密の中に包まれて知るに由なし。然れども世間の風説は之を以てネロ帝の所爲に歸せり。蓋しネロは羅馬府の炎上する熠々たる光景を見て樂まんと欲し、又該府を一層宏壯華麗に再建して之を己の名に循ひて「ネロポリス」(ネロ府)と名づけんとの功名心を滿足せしめんとしたるなりと云ふ。火災起りし時に彼は其の生地アンチアムに於て海邊に滯在しをりしが、猛火已

の宮殿に迫るに至りて歸り來りて、之を防がん爲に非常なる盡力をなせり。而して後彼は市府の再建に着手せしが、其の事業は彼の死後に至りて初めて成就せり。ネロ帝は其の半ば燒失せし假宮殿を一變して「黃金殿」となせり、其の金碧輝煌光彩燦爛たる實に天下の奇觀なりき。

ネロ帝は放火の一般の猜疑を免れんが爲め、又其の惡魔然たる殘忍の心性に新快樂を供せんが爲めに非道にも其の放火の罪を基督教徒に負はせたり。蓋し基督教徒は殊にパウロが公然と審問せられ且つ羅馬に着々傳道の功を奏せし以來、ユダヤ人と區別せられて、該人種より出でたる最も危險なる族類と見做されたればなり。彼等

は確かに羅馬の諸神を蔑視せる者、またシーザル(カイザル)よりも高き王者に忠信なる臣民なりき。而して虚妄にも隠密の罪過を犯すとの嫌疑を蒙むれり。警官も人民も彼の寒心すべき災害に由りて恐惶を引起しゐたれば。如何なる讒誣にても信ぜずと云ふことなかりき。是に於て或る基督教徒は捕縛せられ、其の信仰を明言し「放火の罪よりは人類を悪むの罪を以て死刑を宣告せられたり」(タシタス)、

此の虚妄なる放火の誣告に加ふるに、同じく無根なる不仁(人類を憎む事)の罪及び逆性の罪を以てして、茲に異教の羅馬にとりてすらも空前絶後なる大虐殺こそ起り

たれ。基督教徒の「莫大なる群衆」は最も寒心す可き有様に誅戮せられたり。或る者は恐らくは嘲弄的に基督の刑に擬して十字架にかけられ、或る者は野獣の皮に包まれて闘場内にて狂犬の歯牙に投與せらる。但し此の悪魔の惨劇はバチカン岡の側腹なる帝室の園囿に於て夜中其の頂巔に達したり即ち基督教徒たる男女は、瀝青或は松脂を塗られ、松の柱に釘うたれ、暴徒の遊樂に供する炬火(たいまつ)として火を點ぜられたり。然る間にネロ帝は奇裝を成して競馬に加はり、自ら其の馬術の伎倆を示せり。

基督教は今や始めて其の創立者の年齢に達したるばかりなるが、今茲に羅馬に於て滅絶したるが如くに見ゆ。

初代基督教徒はペテロ及びパウロと共に葬られ了りぬ。戰々兢々たる基督信徒の前途は必ず暗澹たりしならん。彼等は三十四前基督が十字架にかけられ給ひし夜に於けると殆んど同じき失望落膽に沈みしならん。然れども復活の朝は相距ること遠からざりき。ペテロが殉教の死を遂げたる處、直ちに基督教國中なる最も大なる教會の屹立する靈場となり、此處にペテロの相續者と稱する者〔法皇〕の宮殿巍然として天に聳ゆるに至れり。

ネロ帝迫害と黙示録

重なる使徒たちの中此の大殺戮の事を記錄すべく生

殘れる者は只ヨハネ一人のみ。彼も亦イエスの名の爲に迫害を蒙むりし者なりしや疑なし。而してパトモスの孤島に逐客として默示錄の異象幻相の中に之が慘狀を描寫せり。

此の隱微なる書(默示錄)は——六十八九年の交に書かれたるにもせよ、九十五年に於てドミシヤン帝の世に書かれたるにもせよ——當時の教會の爲め、また後世の爲めに書きたるものなること疑なし。而して其の體裁たるや目下の讀者に其の烈火の試練の中に於て幇助と安慰とを得しめんが爲めに、之が實際の境遇と周圍物とに十分に適應せしめたるものならざる可からず。彼等は其の

暗示せらるゝ所の事の起りし年を去ること遠からざるが故に、後代の讀者よりは其の意味を遙に明に理會して之を實用に供せしならん。

先見者ヨハネは其の七岡の上に跨り坐せる婦人を指して、『聖徒の血に醉ひイエスの證を作し者等の血に醉ひたり』と言ひ、又其の婦人の滅亡を預言して、『聖徒、使徒、豫言者』の爲めに喜ぶべき事と言ひたりしは、是れ疑ひも無くネロ帝の迫害を考へて說をなせし者とす。(默示錄十七章六節、十八章二十節を見よ。)

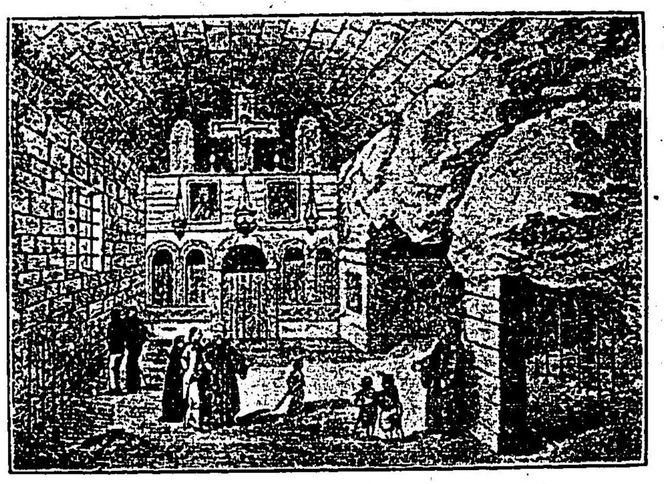
十二使徒(イスカリオテのユダを除きパウロを加へて)の中ヨハネ(約翰と書す)獨り天壽を全うしたりと信ぜらる。寔に彼が前途は、基督の語もあり

て弟子間に一疑問となりをりしが如し、即ち第四福音を自ら筆を執りて書き又は口授して書かしめしと信ぜらるるヨハネは其の人にして、然ばにや該福音書の末(廿二章十七節以下)に斯く記しぬ、——

『イエスペテロに曰けるは、我が羊を牧へ、十八誠に誠に我なんぢに告ぐ、爾いとけなき時みづから帶し意に任せて歩きぬ、老ては手を伸て人爾を束り意に適はざる所に曳き至らん、十九斯く言へるは其如何なる死にて神を榮んといふ事を示したるなり。是を言て後また彼に曰けるは我に從へ、二十ペテロ反顧てイエスの愛せる弟子の從へるを見る、此の弟子は晩餐を食せる際イエスの懷に倚りてをり、主を賣す者は誰ぞやと問し弟子なり、二一ペテロ之を見てイエスに曰けるは主よ斯人は何如ん、二二イエス彼に曰けるは我もし彼が生存らへて我の來るを待つを望むと

も何ぞ爾の與る所ならんや、爾は我に從へと、三三。是に於て此言兄弟の中に傳りて、此弟子は死じと言り、然ともイエスはペテロに彼は死ずと言しに非ず、我もし彼が生存らへて我の來るを待つを望むとも何ぞ爾の與かる所あらん乎と言しなり。』

此のヨハネも亦羅馬官憲の爲に猜忌せられ、送に執へられて地中海の一小島嶼パトモス(Patmos)へ流されたり。パトモスは今はパチノ(Patino)と呼ばれ、全島多くは巉巖不毛にして險岸峭立し(學者の研究に依るに)羅馬時代には流刑人を送る地として、氣候こそ異なれ、我が昔日の樺太に髣髴たるものなりき。然れば聖書にヨハネが此の島へ流されたりし由を記せるは、暗に此の事實と符合して、該記事が後人の揑造に非ざることも亦同時に證明せらると謂ふべし。此の島には岩窟少なからずして、中に一大洞房窟室あり、昔ヨハネの住居せし處と稱し、何時の世よりか一箇の窟堂と化して、參詣客年中絶えずと云ふ。



聖ヨハネの住ひし窟室

此の洞窟裏に在りて、聖ヨハネは其の著明なる天啓篇を書けりと信ぜらる。即ち所謂默示錄(アポカリプス Revelation)是なり。新約聖書の末卷たる此の奇書に於て吾人が認むる所は、

慘酷なる大迫害の事實にして、而も又其の最大迫害者を羅馬皇帝ネロと指示したるに在りとす。即ち默示錄(天啓篇の義)第十三章にヨハネは說て曰

く

第十三章

一 われ海の砂の上に立て、一匹の獸の海より出るを見たり之に七の首と十の角あり其角の上に十の冕を戴き、其首に僭妄の名を書せり 二 我が見し所の獸その形は豹の如く其足は熊の足の如く其口は獅子の口の如し龍おのれの能力と座位と大なる權威を之に予たり 三 我この獸の一の首傷を受て幾ど死んとする狀なるを見たり其死んとする狀なりし傷愈ければ全世の人これを奇として從へり 四 龍その權威を獸に予しに因て人々龍を拜し又この獸を拜し曰けるは誰か此獸の如き者あらんや誰か之と交戰をなし得もの有ん乎 五 この獸夸大なる言と讒す言とをいふ口を予られ又四十二ヶ月のあひだ働をなすべき權を予らる 六 かれ口を啓て神を讒し其名と其幕屋および天にすむ者等を讒せり 七 かれ聖徒等と戰ひ之に勝こと を許され又諸族諸民諸音諸國を宰どる權威を予られたり 八 地に住る凡の人即ち世の始より殺され給ひし羔の生命の冊に其名を錄されざる者等

は此獸を拜せん 九 耳ある者は之を聽べし 十 凡そ人を虜にする者は己また虜にせられ刀にて人を殺す者は己また刀にて殺さるべき聖徒の忍耐と信仰茲に在○ 十一 我また一匹の獸の地より出るを見たり之に二の角ありて羔の角の如し且その言ふこと龍の如し 十二 この獸先の獸の前にて先の獸の凡の權威をとり、地と其上に住る者をして先に死んとする狀なりし傷の愈たる獸を拜せしめたり 十三 また大なき奇徴をなし人々の前にて火を天より地に降し 十四 且その權を得て獸の前に行ふ所の奇徴を以て地にすむ者を欺き彼等に語りて彼の刀傷を受てなほ活る獸の象を作らしむ 十五 彼この獸の象に生命を予へ之をして言ふことを得しめ又その象を拜せざる者を悉く之に殺しむるの權を予られたり 十六 かれ衆人をして大小貧富自主奴隸の別なく或は右の手或は額に印誌を受しむ 十七 印誌すたはち獸の名あらざる者あるひは其名の數あらざる者は凡て貿易する事を得ざらしめたり 十八 此獸の數目の義を知ものは智慧あり才智ある者は此獸の數を算よ獸の數は人の

數なり其數は六百六十六なり

然るに、此の六百六十六の數は是れ希百來字母を數字と爲して併列したるものなれば、今これを普通の字母に改たむるや、正にNeroと成りて、即ちネロ帝其の人なりとす、之を數字的釋義法と稱す、具に「二十世紀聖書新釋」中に講述せるが如し(同書第三章を見よ)聖ヨハネ(St. John)は玆に此の窟室の中に於て天啓を蒙り、ネロ帝の大迫害を想見して、該書を記述し、以て時の基督教徒を警戒し且慰藉せり、最後の勝利を預言したれば也、斯のごとくなるも猶論者はネロ帝の治下に何等の迫害も無かりしと言ひ得るや、實に、何れの邦國たるを論ぜず、迫害は基督教會の初に於ける必隨物に

して、洋の東西を問はず、全く其の軌を同じうす、請ふ試みに我が國に於ける同樣の迫害を見よ、長崎の殉教は即ち羅馬の殉教なりと謂ふべし、今『鮮血遺書』に依りて德川氏が行ひし迫害の一斑を圖示せんか、——(口繪參照)

獨り基督教に於てのみ然るに非ず、凡そ國教または准國教の存する邦に新教若くは新宗として起りたるものは古來必ず斯の如く迫害の洗禮を受けたりしものとす、例へば彼モルモン教に於ける如し、ジョセフ、スミスーたび起つて、自家獨得の選民史を挈げ、讀如字的聖書解釋法を主張し、日蓮的に、諸他の宗旨を悉く無間亡國國賊天魔視し去れるや、猛烈なる反對は驟然として四方に起り、遂

に其の身は暴徒の爲に銃擊せられ、事業半ばにして殉教の死を遂げ了りぬ。然るに、寔にも殉教者の血は教會の種子なりけん。該宗は爾後忽ち血染の旗旆を以て其の信徒を倍蓰し來り、一大勢力と成りてユタの一州に割據し、今は世界中に其の傳道者を出しつゝあり、嘗て我國には其の十二使徒中の錚々たるグラント氏遠征せられたり、今は去りて倫敦に在りと聞く。

斯の如く基督教も亦最初よりの此の大迫害ありて、基督の存在を證明す、誰か折衷揑造的ロマンスの爲に甘んじて迫害に死せんや、論者の沒常識も玆に至りて極まれり。

(註) 基督教には長大の歷史ありて、而して其歸史重に最初は迫害の歷史なりとす、若し迫害史を一瞥せば、何人も基督の存在につきて竊かに首肯する所あらんとす。今左に之が一斑を略叙抄記すべし。

第二世紀の初、羅馬皇帝トレージャン(Trogn)は英明無比の模範皇帝と稱せられたりしが、基督教の迫害は此の帝の治世より其の端を發し來りぬ。史に曰く、——

其の治世の初にトレージャン帝は詔を發して多人數の相合成する諸結社團體を禁遏せり。是れ斯かる團結體が國家を危うするの具とならんことを恐れてなりき。此の詔の如何に基督教徒に向ひて妄用せられ得しかは想像するに餘りあり。是れ基督教徒は絶大なる兄弟會(教會)を結成せるものにして、其の會たるや羅馬帝國の內外に於ける諸國悉く廣がり、親密なる繫綱に由りて相結ばり、其の說の中にも其の行の中にも、共に門外漢には秘密と見えたるが如きもの多かりければなり。

紀元百十一年の頃、少プリニ當時ビテニア及びポンタスの總督(プロ

コンスル)として一書を帝に書き送り、其の際會せる新事件につきて訓令を請へり。

其の書中に彼は帝に告げて曰く、基督教徒が斯かる者として彼の前に曳かれし時には、彼先づ之に基督教徒なるやと問ひ、彼等若し然りと答ふれば、何處までも言ひ張る者をば死刑を以て之を嚇しつゝ、尙再三同一の問を繰返し、而して其の中執拗にして之に固着する者を刑殺せりと。斯の如く彼は基督教の性質は如何なるにもあれ、斯かる頑固は則ち彼等をして有罪ならしむとの理由を以て處罰をなせり。

當時羅馬帝國の法律にして基督教を禁遏せるものありしか否やは一疑問なり。但しテルタリアンは言へらく、ネロ帝の法律は悉く廢弛せられたれども、其の中基督教を禁遏せんとせる法律のみは尙依然として行なはれたりと。且又當時の記錄を按ずるに、公然と福音を信奉するの所爲は法律を以て處罰せらるべきものなりしが如し。

彼の告發を以て己の前に曳かれし人々の夥しかりしが爲に、プリニは其の處置に惑ひたり。彼は彼等(嫌疑者輩)に要むるに、諸神の形像の前に於て、帝の影像に向ひて香を燒き、或は灌祭を行はんことを以てし、或は基督を詛はんことを以てして之を試みたり。彼が言たる所に依れば、眞に基督教徒たる者は一人も之に應ずるは無かりしと云ふ。或る者は其の信仰を棄てたり、或る者は答へて我等は數年前或は二十年來基督信徒なりしが、既に然ることを止めたりと言へり。斯かる人々はプリニの要めし所に應じたり。但し彼等はまた明言して言へらく、彼等の罪惡――若し罪惡なりとせば――は只是に在り、卽ち彼等は或る定日に於て日出前に相會して其の神とせる基督にむかひて讃美歌を謳ひ、嚴肅なる約束を以て相約して、偸盜或は姦淫を行はに、眞實を言ん委託せられたる物を決して私せじと誓ひ、然る後皆一餐に與かり食へり。此の中にも亦毫も咎むべき者あること無し。

プリニは今一層其の實情を詳にせんと欲して女執事(ディアコニス)と稱ふる婦人二名を執へしめて之を拷問せしが、別に何をも彼等の口より吐かしむるを得ざりき。只彼等の迷信の如何にも笑ふに堪へたるものにして、彼等が之に固着せることの奇怪千萬なるを感ぜしのみ。

是に於てプリニは先づ其の事を帝に奏聞して其の意見を問はざる可らずと思へり。此の事たるや殊に必要なりき。「如何となれば(彼自ら奏して言へらく、關係せる人々の數は莫大にして、老少、貧富、男女を別たざるに因り、又此の迷信たるや唯に其の毒を市府都會に流せしのみならず、亦村落にも田舍中にも等く蔓衍したるに因りて此事を奏請すと、但し彼は斷言して曰く『然しながら此の害惡は救治し難きものに非ず、已に彼が之を禁遏せんとの策を施せし以來、夫の今まで殆んど打棄てられて顧みる者も無かりし諸々の神宮は再び參拜者を得るに至り、今まで買ふ者の極めて僅なりし牲畜も再び犧牲の爲めに常に携へ來らるゝ

事となりぬ。』

帝の答書は左の如くなりし、『自ら進んで基督教徒を探す可からず。彼れ等に對する無名の告訴は受理す可からず。彼等若し告發せられなば之を處罰すべし。但し諸神に犧牲などを捧げて其の告發の誣妄なるを明にせる者は此の限りにあらず。』

ビテニアに於ける迫害の此一段の話は、羅馬帝國の內、他の各部分に於て行はれし窘迫の一班を示すものなり。但し是時より後僅か二百年餘にして、他の羅馬帝コンスタンチンは同一地方卽ちビテニアのニケアに三百名の基督教監督(エペスコポス)を召集して一大會議を開けり。是れ實に感ずべき大變化と謂ふべし。該の會議に於て基督が永遠なる神たるの教は、ニケア信經の中に於て天下に宣布せられたり。是れ卽ち一千五百年來世人が奉ずる所の信經なり。殉教者の血は教會の種なり、と言はれたるが、實にビテニアは其の好例たりしなり。

テルタリアン以上の事蹟(トレージャンとプリニの件を評して曰く、トレージャン帝の爲したる如く、斯く基督教徒を犯罪者と斷じながら、亦之を進んで探すことを禁せしほど矛盾なるは復たとあるべくもあらず。其の斷案に由りては之を有罪とし、其の禁制(彼等を探すを禁せし事)に由りては之を無罪とす。何ぞ撞着の甚だしきや。且又此の禁制を以て、與へんとしたる保護ほど無功なるものはあらざりき。此の保護ありしに拘はらず、基督教徒の困難はトレージャンの治世に至りて倍蓰せり。」トレージャンの治下に起りし迫害に於て主イエスの親戚なるシメオン――エルサレムの監督(エピスコポ)ヤコブの兄弟(或は多分從兄弟)にして、又これが相續者として同監督の職に就きし者――の殉教起れり。傳へ云ふ、或る異端者彼を基督教徒とし、ダビデの子孫として總督アッテルスに訴へたり。數日の間此の老監督(エピスコポ)は種々の慘酷なる拷問を受けたりしが、榜觀者をして舌を卷かしめし忍耐を以て之を忍び、終に一百二十歳の

高齢を以て十字架の上に磔殺せられたり。

但しトレージャンの世に於ける殉教にして至當に最も名高かりしものは、聖イグナチウスの殉教なりき。是れ實に古代の教會史中最も著明なりし事件の一なりとす。而して其の然る所以は、啻に其の事自身の爲のみに非ず、此の老尊監督(エピスコポ)の名を負へる數通の書翰に伴ふ關心の大なるあるに因りてなり。イグナチウスはヨハネの弟子たり。ポリカルプの友たる者にして、スリアのアンテオケの監督(エピスコポ)たりき。當時此の市府(まち)には二十萬の人口ありき。使徒等の殉教の後に在りては殉教の中に神の力と恩(めぐみ)との顯はれて、禍を轉じて福となし、神の僕どもをして其の兼敵の勝つことを得しめ、神の榮光と教會の榮光とを進むるを得しめしは、此殉教を以て最も著明なりとす。

此の殉教の年は疑はし。然れども畢竟是れ紀元百十五年の末なりしと云ふ說最も實に近きに似たり。百十四年トレージャン帝のダシア遠

征を記念する爲にトレーヂャン柱と稱するもの羅馬に立てられたる後、帝は東方に向ひて出發し、其の秋アテンスとセリウシアを經てアンテオケに達し、此處にて冬を過せり。

百十五年の早春、帝パルテア遠征の準備をなしつゝ尙此處に在りしに、大地震起りてスリアの此の市府と其の他の諸處を大に破壞し、且つ帝の生命をも危うせり。コンスルペドは此處に斃れたり。此の天災は人民を刺戟して基督教徒を憎ましめたるならん。是れ彼等は此の如き災害を以て基督教徒の所爲に歸したればなり。

アンテオケはキリストの信者が始めてキリステアン(基督教徒)と稱へられし處なれば(使徒行傳十一の二十六)此には必ず暗黑の權力と基督教會の間に長き烈き爭ありしならん。異教の諸殿堂(神宮)の神官及び信徒、並に凡て夫の絕大なる異教系と關係を有せる人々は、帝が其の府に輦を駐めをらるゝを幸ひとして、基督教を殲滅せんと務めたるべし。

彼等は謂へらく、教會の監督(エピスコポ)イグナチウスにして死刑に處せられたらんには、教會自身も萎靡して振はざるに至るべしと。

イグナチウスは帝の前に曳出されて帝に訊問せられたり。帝曰く、『此の惡鬼につかれたる者、敢て朕が命令を破り、又他人を勸めて同じく之を破らしめんとする者、是れ何ぞや。』イグナチウス答へて曰く、『テオフヲルス(神を其の哀に宿(やど)す者)を惡鬼と呼ぶ者なし。惡鬼は神の僕たる人々より遠く離れ去れり。我は基督を我が天上の王として戴くに因りて、惡鬼の攻擊をば之を逐ひ退く。』トレージャン問うて曰く、『テオフヲルスとは何人ぞや。』イグナチウス答ふらく、『基督を其の胸中に宿す者是れなり。』帝曰く、『我等は神々を我等の同盟者として敵に向かひて之を用ふる者なれば、我等も亦神々を心中に置く者なるに非らずや。汝は然か思はざるか。』イグナチウス曰く、『異教の鬼神を彼の名を以て稱へらるゝは誤れり。宇宙には只一神あり、卽ち天地と海と其の中の萬物を造り給ひし者

是れなり、只一キリスト、イエスあり、卽ち神の獨子にまします者是れ也。願くは我彼の國を享受を得んことを。」帝問らく「汝は彼のポンテヲ、ピラトの下にて十字架にかけられし者を指して謂ふなるか。」イグナチウス曰く「然り、我は彼を指して謂ふなり。彼は我が罪と其罪の作者とを十字架にかけ、且つ諸の惡鬼の迷妄及び害惡を排斥し、己を其の胸中に宿す人々をして惡鬼を足下に踏ましめんとす。」帝曰く「然らば汝は夫の十字架にかけられし者を汝の心中に宿すと云や。」答へて曰く「然り、如何となれば我彼等の心に宿り、彼等の中に歩まんと記されたればなり。」

是に於てトレージャンは宣告を與へて曰く「イグナチウスは夫の十字架にかゝりし者を其の身に宿すと云ふに因りて、朕は命ず、兵卒をして彼を囚人として大羅馬に曳き行かしめ、之を猛獸に投げ與へて人民の娛樂に供すべし。」

（是の如く聖イグナチウスが殉教の死は偶然にも亦基督の實在を證

驗する具となりたり、皇帝とイグナチウスの問答の如きは當時一般に屢ば耳にせる所にして、何人も怪しまざりしものとす、是れ基督の存在が深く信ぜられ來りし證左にあらずして何ぞや。但し基督教徒の迫害は間歇的にてありしにもせよ、連續的にてありしにもせよ、往々大殉教者を出すに至りぬ、ジャスチンマータル及びポリカルプ兩祖師の殉教を以て其の中の壓卷とす）教會史を按ずるにトレージャン帝に次いでハドリアン、アントニアス、パイアス、アーカス、アウレリアスの三帝羅馬帝國を統治し、益す其の大版圖の一致結合を鞏うするに至りしが、アントニアス帝の治世にジャスケンと名くる大宗教家あり、後殉教してジャスチン、マータル Justin Martyr と世に稱せらる、殉教ジャスチンの謂なり、彼は護教論（アポロジ）を草して之を帝と其の二人の養子及ひ元老院、並に羅馬の人民に呈し、大に基督教徒の爲めに論辯せる所ありき。ジャスチンは其の猶太人トリフヲてふ者との「問答」に於て自ら己が宗教上

の意見の進歩せし順序を陳べたり。彼先づ希臘哲學中の最も盛んに行はるゝ者を此れ又は彼と順々に研究し、或は其の說の不完全なるが爲に或は其の師の不品行なるが爲に、一々に之を嫌厭し、而して最後にプラトの哲學を奉ずるに至りしが、其の後一日沈思冥想しつゝ海濱を徘徊し居りしに、一箇の溫雅なる老翁來りて彼を呼びて曰く、彼が研學せる所は迂遠にして無用なる者なりと。而して彼に預言書と新約書とに眼を轉せんことを諭し、『且つ光明の門の彼が爲に開かれんこと』を祈らんことを彼に勸めたり。斯く指示せられたる諸書を閱して、彼が心中に起したる信念は、基督敎徒が其の信仰の爲に迫害と刑戮とを耐へて渝ること無き節操を觀るに及びて愈々强くなりゆけり。蓋し彼は是より先に已に此の節操を目擊して、彼の世俗が囂々と基督敎徒の不道德を非議するの無根なることを感じゐたりしなり。是に於て彼は其の今までに究め來りし諸派の哲學に就きて、未だ曾て感せざりしが如き十二

分の信仰を以て基督敎に歸し、而して之が辯護と傳播とに畢生の力を盡せり。彼エジプト、アジア等に周遊せしが、常に哲學者の服を身に着けゐたるを以て、其の儀容自ら堂々として、其の所說に人々の耳を傾けしむるに益ありき。但し其の平素住居せし所は羅馬にして、此に彼は基督敎哲學の門を開けり。

マーカス、アウレリアスの治下に在りて敎に殉せし最も著明なる者はジャスチン及びポリカルプなりき。アウレリアス帝の世となりて未だ久しからざるに、ジャスチンは羅馬の或る基督敎徒が道の爲に殺されしを見て、第二の護敎論(アポロジ)を草するに至れり。其の中に彼は己も遠からずして其の敵の爲に陷れられんことを期する由を公言せり。殊に彼は一犬儒クレスセンスの毒舌に由りて陷いれられんことを期せり。ジャスチンは此のクレスセンスを評して、彼が憎むべき學派の中に在りて甚だ陰險なる惡徒なりと言へり。此の豫期は速に其の遂はざ

ることを明にせり。ジャスチンは堅忍と尊嚴とを以て其の審問に答へをはりし後、羅馬に於て首を斬られ、而して爾來常に其の名に伴ふ殉教者てふ榮譽の稱號を得るに至りぬ。

ジャスチンの殉教につぎてポリカルプの殉教起れり。彼の歷史は元初の教會史中に著明なる一章を成すものといふべし。彼は自ら其の少時の好機會と長命とに由りて、使徒時代の口碑を傳ふるに最も有功なる具たりしなり。其の少時に在りては聖ヨハネの弟子にして、後年に及びては彼れ彼の使徒及び其の他の使徒の言ひし所を語るを以て喜びとし、彼等が記憶して己に告げし主イエスの言談、奇蹟、教誨等を話すを以て樂みとせり。使徒ヨハネの手に由りて(然か推斷せらる)スムルナの教會の監督に立てられ、其の師の訓誨を十分に心中に蓄へ、斯くして教會の尙幼稚にして多難なりし日に於て、之が創立者の紀律及び教義を維持するを得たり。ポリカルプは其の職任を盡くすに活潑に且つ熱心

にして、其の勢力は亞細亞の大部分に感せられ、久しく諸教會が由りて以て歩みし所の光なりき。想ふに默示錄中にスムルナの「使」として掲げ出されしは多分此のポリカルプなりしならん。彼が殉教者イグナチウスと交渉ありし事は已に之を說けり。アントニアス、パイアスの二世の末つ方、ポリカルプは羅馬を訪へり。是れ主に復活祭(イースター)を守るの時に就きて亞細亞の諸教會と他國の諸教會との間に起りし疑問を論決せんが爲なりき。從來亞細亞人は猶太の第一月の十四日——猶太人が越節の羔羊を食ひしと同じ日——に踰越の晩餐を行ふを常とせり。而して是より三日の後、何曜日に當るをも顧みずして、復生祭を行へり。之に反して、他の教會は其の聖週の斷食を中斷するを不合法となし、又は復生を祝するは只其の第一日に限るとなせり。故に其の復生祭は常に必らず日曜日に、其の踰越の晩餐は其の前晩に起れり。此の亞細亞教會の慣例は其の源をヨハネ及びピリポに發し、他の教會の慣例はペ